
闇色の二重奏

まーや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇色の二重奏

【Nコード】

N0544X

【作者名】

まーや

【あらすじ】

望んだのは平穏で平凡な一生だった。夢は小学校の教師になること。それなのに気が付いたら全く知らない場所で、目の前には金髪碧眼美女が一人。しかも僕の母親と来た。いやいやいや。僕の名前は【橋本誠也】で決して【ダット】なんて名前ではなくて 唐突に異世界に放り込まれ、混乱する青年(?)の成長記。一人称で不定期更新。

いきなりな急展開

頭の周囲、で脈が打っている感覚というのがわかるだろうか。

よくよく考えてみると気持ちが悪いが、こめかみの辺りがピクピクする状態によく似ている。それに合わせて頭が痛い、と後頭部をさすればこぶが出来ていた。

そりゃそうだ。

なんとたつて、僕の背中には堅い床。

理由は推して知るべし。

当然転けて頭を打ったからという簡単で単純なことだった。

そして。

「やだ、ちよつ。大丈夫？」

僕をのぞき込むのは金髪碧眼美女。

お互いの息が触れ合う程度の距離に顔をつき合わせている。しかも、彼女が僕の上に被さった状態で。

うわあ。何この状態とか思っていたら、何気なくヤバイ状態なことに気がついた。

彼女のワンピースの隙間から微妙に胸の谷間が見えている。

かなり唐突ではあったけれど、これって男としては鼻の下を伸ばしてもオツケーなシチュエーション。だよな。

更に言えば、フラグっばいよな。これ。

しかし生憎とマジマジと見て頬を平手で叩かれるなんて趣味はないので。

「えー。ヘイキなので。とりあえず僕の上からどいて頂けませんでしょうか？」

とりあえず、そこから視線を逸らせて紳士的対応にしてみました。まあ、こんな美女に対してぶしつけに胸の谷間見てました。なん

てとても格好がいいとは思えないし。

あ、でもちらっと見えたな。でも、バレたら印象悪くなりそうなのでそうならないようスルーする選択を取る。

「あれ？」

なんでか不思議そうな顔されたけど。

「どうして敬語なの？」

あれ、それが原因？ って、いいからとりあえず退いて欲しい。とお願いしたらすんなり退いてくれた。

よし。これでひとまず大丈夫、と。

では、改めて状況確認しようか。

体を起こして立ち上がる。とりあえず一番痛いのは頭痛。疼いているという感じに痛い。あとは……うん。お尻とか背中もちょっと痛い。

多分受け身も取れないままがつり倒れてしまったんだろう。

先程の状態から見ておそらく僕は彼女にぶつかり、そして押し倒された。と。

うん。なんていうかダブルで美味しいシチュエーションだったよ
うだ。

まあ、その分体のダメージも大きかったようだけど。

そんなことを考えていると。

「ねえ、大丈夫？ やっぱり頭打ったところが痛むの？」

本気で心配そうな顔をして腰を屈める金髪碧眼美女がいた。

おっと。うっかり思考の世界に行きかけていた。

「あ、大丈夫です」

僕は金髪碧眼美女を見上げて……ん？

見上げて？

あれ。なんかおかしい。

頭の中で、警鐘が鳴る。というのはこういうことを指すんだろうか。

違和感にふと周囲を眺めて、僕は肩の辺りにあるテーブルに気が

付いた。そのテーブルはかなり大きく、備え付けてある椅子もまたそれに合わせて大きい。

そう。僕を見つめる金髪碧眼美女がぴったり丁度と思える大きさで。

「なにこれ、巨人の国？」

思わず洩らしたのはどこかのおとぎ話を思い出したからだったが。

「ちよつ。ダット!？」

金髪碧眼美女は蒼白になった。

あれ。ちよつと待って。僕なにかした？

「や、やっぱりさつき頭売ったのが原因なのかしら。ど、どうしましょう。お医者様？　そう。お医者様呼ばないと駄目かしら？」

なにやら慌ただしくなって参りましたが、彼女がどうしてそんなに慌てるのかさっぱりです。

多分おそらく、いや、絶対。僕に原因があることは間違いないけど。

いや、それにしても妙だ。

どうしてこの金髪碧眼美女はこんなにも僕のことを気にかけるんだろう。

他人なのに。

「い、いえ。まずあの人に言うべきなのかしら。ああああ、どうしたらっ」

「あの」

控えめに声をかけてみる。が、聞こえていない様子。

仕方がないので、蒼白になった頭を抱えてオロオロしたじめた金髪碧眼美女のワンピース。その裾を引っ張ってみた。

「あーのー」

少し大きめの声で。

そうしたらようやく彼女は気が付いたみたいで、僕の方を向いてくれた。少し涙目になっているのがいたたまれないけど。

でも疑問をちゃんと明らかにするのが先だ。

けど、思えばこのときも少し考えて発言するべきだったのかもしれない。
それでも、このときはこれしか考えられなかったんだから仕方ない。

「お姉さん、誰？」

ええ、浅はかでした。よもやそうなるとは思ってもみませんでした。

完全なる予想外の展開が僕を待っていた。

結論から言つと。

お医者様と呼ばれました。

さらに。

「はい、君の名前は？」

「橋本誠也」

「年は？」

「二十歳」

「出身地は？」

「……日本だけ」

白衣は着ていないけど、医者らしい中年の小父さんにごく当たり前の質問をされたので返答したら、金髪碧眼美女に泣かれました。

泣かれる覚ええないのに、どうしよう。

その考えが間違いだとは、今の僕には知りようがなかった。

状況整理

ぶっちゃけて言っと。

一、どうも金髪碧眼美女は僕の母親らしいです。

二、でもって、僕は今十歳を迎えたばかり。

三、名前はダット。ダット・クリークス。

四、出身地はジードリクス王国のカーライルという町。ちなみに今いるのもココ。

五、ってことはここは日本ではないわけで、じゃあ何処だっけとになるわけですが。

六、……………ここ何処？

それを言ったら、また金髪碧眼美女に泣かれることになるから言わないけど。

でも、僕だっけって混乱中だ。

気が付いたら金髪碧眼美女と一緒に床に倒れてたみたいだし、なんでか周りの物は全部大きいし、よくよく見たら全然全く知らない場所だし。

「うーん。記憶喪失、だと思っんですけどね」

そう言っただけで唸っているのは僕を見てくれた医者だった。

「全く違う人間だと言われたのは初めてですよ。ええ。本当に。普

通は名前も年齢もわからない状態のはずなんですが……」

うん。その意見には賛成だよ。お医者様。

普通の記憶喪失ならね。

でも、僕の場合はおそらく違う。

自分でもよくわからないけど、おかしいとは思っけれど、自分の顔を手鏡で見せられれば、そこまでされればわかってしまう。

髪の色こそ黒だが、顔たちは正に金髪碧眼美女を幼くしたようなあどけなさを宿した少年そのもの。

平凡な黒髪黒目は一体何処へ行ってしまったのか。

というぐらいの変わりようだった。

もちろん声だって変声期前の子どもなわけで。

つまりこれは。

「生まれ変わったとか、そういうオチ？」

それともどつかの少年に取り憑いて体でも奪ったか。

うん。後者だったら物凄い罪悪感ありまくりだ。

っていうか、僕、それだと死んだことになるのでは……？

「いやいや待て待て」

頭を振って考え直す。

そもそもどうしてこうなった？

僕はこの場所にいるという自覚が出来る前はどこにいたのだろうか。

まずはそこからだ。

ということ、こうなる前の記憶を引っ張り出すことにした。

まず、僕の名前は橋本誠也。年は二十歳。職業は大学生。

要するに、学生だったわけだけ。

将来の夢は小学校教師。

地味で、平凡で、当たり前前の生活がしたいと望んでいた。

他の連中は逆玉で金持ちになる海外でスロット当ててやるとか、冗談風味にでかい口叩いてたけど、就職が世知辛いこのご時世。そんなギャンブルめいた危ういことをする勇氣も志も持たない僕には遠い話だった。

それを「意気地なし」だの「タマなし」だの揶揄されることもあったけど、それなりに楽しい学生生活を送っていた。

まあ、大学行く条件に学費の半分は自分で出す。って約束してたからバイトもいろいろしてたけど。

そこそこ充実した毎日だったんじゃないかと思う。

そう。至って平凡な大学生活をしていたはずだったんだけど。

「お、いたいた。よう。橋本」

講義終了後にやってきたのは、今時のピアスやらファッションに身を包んだ女子からも人気の高い男。

名前は神谷修平。

いくつか僕と同じ講義を取っていて、隣に座ることも少なくない。今のところは友人未満のよく話をする知人である。

その容姿のごとくちゃらんぽらんに見えるが、実は結構真面目で講義をさぼっているのを見たことがない。のに、遊びにも手を抜かない器用な男。というのが僕から見た彼の評価だ。

「あ、神谷。どした？」

気が付けば毎回違う女子が隣にいる。そんな彼に相応しく今日も今日とて見知らぬ女子が一人側に立っていた。

今日日珍しく髪を染めていない黒髪女子である。しかも、今まで神谷というこの男が連れ歩いていたコンサバ系統の女子ではない。

「宗旨替えした？」

思わずそう問いを発してしまうほど、彼の好みには見えなかった。全身を黒で埋め尽くし、おおよそ地味めな独自ファッション。顔は美人だが、ちょっと目がきつい。

うーん。黒でゴシッククロリータだったか。

そんな連中がうつうつしているのは見たことあるが、その辺とはまた一線を画した雰囲気がある女子だ。

「あー、違う違う。この人は法学部の伏見先輩。お前に用があるんだと」

「僕？」

先輩で、僕に用とは一体なんだ。

まさか告白？

いや待て。

僕は彼女を知らない。というかここで期待はいかんだろう。

意識して実は違いましたじゃ、痛い。痛すぎる。

「じゃ、紹介終了。ってことで。オレはお暇する。後で成果を報告しろよー」

神谷の方はどこかおもしろがってさっさと退場。

アイツ、今度合ったらシメテヤル。

結局残されたのは僕とその伏見先輩という女子だけ……ではない。現在の場所は講義終了後の教室である。当然周囲には人の目が。

流石にここで告白とかはないはずだ。よほどの物好きなら別だけど。とか考えていると伏見先輩が僕がいる方向に動いた。

「やつぱり、あなただわ」

切れ長の瞳が僕を捉える。

正直に言っただろうか。

僕も彼女と同じ目の色のはずなんだけど、異様に怖い。なんでかわからないけど、ホントに。マジで。

目が据わっているわけでもない、楽しんでるわけでもない。あえて言うなら、他の奴らにあるような感情が見えないと言っべきか。そんな彼女の目に捉えられて動けない僕の目の前に伏見先輩は立つ。

そして。

「気をつけて。あなた、さらわれるかも」

予想外の言葉は発せられた。

「特に雨の日は危険。出かけない方が身のためよ」
あまりにも唐突すぎてその後は声が出なかった。
というか、なにそれ。

予測の範疇にない斜め上の《告白》は状況を飲み込もうと混乱する以外、僕の全ての反応を奪った。

「じゃあ、忠告はしたわ。無駄かもしれないけど」

用は済んだ。とばかりに僕に背を向けると去っていく先輩。

呼び止め、問いかける間もない。

「……何アレ」

とりあえず、周囲の講義仲間に問いかけてみたけれど。

「俺らが知るわけないじゃん」

はい。その通り。

だけど、後になって思えばこれがきっかけというか原因だったんではなからうか。

僕の記憶が途切れているのはこの翌日。

彼女が言う雨が降った日だった。

天気予報

奇妙な先輩に出会った翌日の天気予報は曇り。

ちなみに降水確率は午前中は三十パーセント。午後は五十パーセント。

家を出るときに「傘を持っていきなさい」と母親に持たされたわけだけでも、僕の心境は複雑だった。

家を出て空を見上げる。

雲は多いが、晴れ間も見える六月独特の天気だろう。要は梅雨。

今日の講義は教授のご都合で午前中のみ。

例の先輩に言われたからというか、なんというか。気分的に行きたくない状態だったが、学業は疎かにしないと密かに立てた誓いもある。

伊達に小学校、中学校、高校と皆勤賞を取ってきたわけじゃない。それにここまでこう来ると大学もやってやるう、って気にならないだろうか。

目指せ、大学も皆勤賞！

……うん。こう、流れるにね。

ともかく、現状大学を休むという行為をするつもりはなかったし、夕方にはバイトが入っているし、家を出ないわけにはいかない。

それに、午前中ぐらいは雨大丈夫っぽかったし。

っていうか、なんで僕あの先輩の言うこと気にしてるんだろう。

「いやいや、あんないきなりオカルトっぽい電波な話……」
実際にあるわけない。

あの先輩の目は怖かったけど。

そんなわけで、大学に行って、講義を受けて、午後は適当に時間

を潰して、夕方にバイトに行つて。
その間、雨は降りませんでした。

おしまい。

ああ。ホントにこれでおしまいだったら、よかった。
よかったんだけど、そうはならない。

ならなかったからこそ、僕は奇妙なことになったわけで。
雨はバイトの後にやってきた。

「土砂降り……」

朝から晩まで降るはずだった量が全部一度にやってきたんじゃないか……？　と思えるほどに大きな雨粒が凄い音を立てて降り注いでいる。

正直、ビニールハウスとか穴が空いてもおかしくないんじゃないかってくらいに。

その証拠に。

傘を差して一歩外に出た途端、その重量が二倍以上に増えた。

普通なら「トントントン」程度の雨音なのに今は「ドドドドドドド」とまるで滝のような音がする。

雷も光つては鳴り、光つては鳴り。

昔、光ってから三秒以内に音がしたら物凄い近い証拠だって聞いた気がするけど……うん。

空気がビリビリと震えてるし轟音だから耳も痛い。

しかも光ってからいつ鳴るかわからないわけで、構えていてもドキリとする。

いや、別に怖いとかそういうわけじゃないけど。

いつ来るかわからない驚きというのが厄介っただけ。

しかも、気温のせいなのか歩く場所歩く場所モヤだらけ。

視界が悪すぎる。

この状態で歩くのは危険だろう。ということとで近くのコンビニに。

横断歩道も目の前で足早に駆け抜けて……滑った。
しかも道路の真ん中で。

頭に物凄い衝撃を受けたのは覚えている。

実のところそれが最後の記憶であり、現在に繋がる記憶、だった
りした。

「うあー」

ベッドの上で悶える。

なんとも情けない最期ではなかるうか。

いや、あれで本当に死んだのなら。という注釈がつくけども。

この状態を見るに、あの伏見先輩の言ったことが見事に的中した
っぽい。

微妙に違うけど。

それともあれはただの偶然だったのか。

「ダット」

金髪碧眼美女がそんな僕を戸惑いながら見つめている。

あ、ヤバイ。泣きそうな顔だ。

「えっと。よくわからないんですけど。あなたが僕のお母さん？」

「……っ！」

あ、泣いた。

「どうしてこんなことにつ。ああっ。でもわたしが悪いんだわ。慌
ててたから、ダットが部屋に入ってきてたことにも気付かずにつ
かってっ！ ごめんなさいダット！」

大泣きして、ベッドの上の僕にしがみつく。

っつか、痛い。イタ、痛いっば！

この人、凄く力が強い。

胸の辺りが彼女の腕で見事に締め付けられて息が出来ない。

「ちよ、はなし……」

死ぬ。死ぬ。息がっ。

「あー、コホン。おかあさん。息子さんが苦しがっていますので、その辺りで」

ありがとうございます。お医者様。

あなたのおかげで死なずにすみました。

肩を叩かれた金髪碧眼美女ははっと我に返って離れてくれた。

「えー、とりあえず。記憶がない以外は特に問題ないようですね。

まあ、記憶がおかしいというのは……まだ頭を打ったばかりですから混乱しているだけかもしれないし。何日か様子を見てみましょう。時間の経過で記憶が戻る場合もありますし」

「ほ、本当ですか？」

「ええ。もちろんこのままという場合もあり得ますが」

金髪碧眼美女の目に再び涙が浮かぶ。

いや、まあ。なんとなく気持ちはわかるけど、対応に困るのでとりあえず泣くのは止めてもらいたい。

「痛み止めの薬は処方しますので、ひとまずそれで経過を。あとは……そうですね。普段と同じ生活をさせてあげてください。ふとしたことでも何か思い出すきっかけになるでしょうから」

「はい、わかりました。ありがとうございます」

その会話を最後に医者が色々と道具を片づけて出て行く。

金髪碧眼美女もそれを追ったので、現在部屋には自分一人きり。

「……………はー。なんじゃこれー」

未だに痛む頭を抱えて唸る。

どう考えても普通じゃない。

自分の部屋だと言われて連れてこられたこの場所。子供用のベッドとか勉強机つぼいのとかいろいろあるけど、どう考えても【橋本誠也】のものではない。

そして、ベッドが置いてある場所から見える窓の外も見慣れた四

角いビルなど存在しない。

あるのはいつかテレビの旅番組で見たようなヨーロッパで見かける風景に酷似していて、まるでどこぞのテーマパークのようだ。

「わけがわからん」

なにがどうしてこうなったのか。

いや、多分原因はあの雨の日にすつころんで頭を打ったからなんだろうが。

なにをどうしたら自分は十歳で、ダット・クリークスなんて別人になっっているのか。

しかも聞いたことない国で、町で、服を見てみたら完全に昔風味。これで混乱するなという方が無理というもの。

僕、これからどうなるんでしょうか。

誰ともなしに、いきなり放り出された場所に問いかける。

今はそれしか出来ないのが少し寂しくて悲しかった。

驚きはまだ続く

実のところ。

僕が気が付いていないだけで、あとでびっくりすることがまだいくつかりました。

中でも、なぜ最初に気付かなかったのかと思ったのは言葉。

普通に聞いて普通に喋って、それで理解できていたから全然まったく気が付いてなかったんだけど、実は金髪碧眼美女とか僕が喋っていたのは日本語じゃなかった。

金髪碧眼美女で日本語が流暢に喋れるとか、そんな人間が早々いるはずもない。

それに気が付いたのは、僕がというかダットが読んでいたらしい本を見せられた時。

それこそ文字通り、目が点になった。

漢字でもなく、ひらがなでもなく、カタカナでもなく、アルファベットでもない。

強いて言うなら……：ハングル語？ を崩してさらに細かくしたような字が書いてあった。

うーん。わかりづらいか。

例を出すなら、中国の簡略化した漢字を日本の漢字に変換した。とでも言えばいいのか。

ともかくそんな感じで、文法は英語に近い。

完全に見たことない文字だが、しっかりと脳内で読めているのはたぶんこの体がそれを覚えているからなのだと思う。

しかし、それ以上に困惑したのは読んだ本のタイトルだった。

「【魔法基礎読本】」

物凄く嘘くさいと思ったのは僕だけだろうか。

魔法なんて代物は空想の世界の産物だってことは常識。

子供向けに絵でわかりやすく説明されていて読み物としては面白かったけど……とりあえず、適当に目を通してその辺に放置。

何かを期待する目でお母様に見られましたが。ええ、何もありませんとも。

そのあと涙目になってたけどね。

ああ、そつだ。

母親がいるっていうことは、父親もいるっていうことで。

僕、ダットが頭を打って記憶喪失になったという知らせを受けて家に帰ってきた彼は、厳つい顔で、何故か鎧つばいものに身を包んだ熊みたいな黒髪の大男。

それを見た瞬間凍り付くしかなかった僕は、肩を掴まれ。

「ダット。父さんだ。わかるか？」

ひげ面の彼に迫られました。

厳つい顔にひげ面は、かなり迫力がある。まさに泣く子も黙るかという状態。

いや、でも知らないものは知らないわけで。

「わかりません」

素直に言ったらこの人にも泣かれました。

泣する大男なんて怖すぎる。つか引く。

まあ、原因は言わずもがな僕なわけだけど。罪悪感もあるんだけど。でもここで嘘付くわけにもいかないし。

とか思ってたなら金髪碧眼美女も混ぜて泣き始めた。

流石に何か言わなきゃ、と思って「ごめん」って謝っただけど。これが失敗だった。

感極まった二人に同時に抱きすくめられて体がみしりと軋みましたよ。ええ。軽く意識が遠退いたとも。

二人とも力が強すぎる。殺す気が。

それはさておき。

新しい情報も含め、もう一度現状を把握するために整理する。
まず、僕の名前はダット・クリークス。
どうにも泣き上戸っぽい金髪碧眼美女が母親で名前はキーラ。

敵めしいひげ面の大男が父親のガリオ。

母親の方は専業主婦で、父親の方は聞いたら町の自警団の副団長
だった。

「自警団ってなに？」

と思わず聞いたら、それも忘れたのかと意気消沈されたが一応説明してくれた。

その内容は、少しばかり信じがたいものだったけど。

「自警団ってのはな。町を守る雄志の集まりだ。仕事は町の治安を維持することと、町の外にいる凶暴な魔物から町を守ること」

うん。前半は納得した。

けど後半部分の魔物って何だ魔物って。

「何！？ 魔物のことも忘れたのか？」

すみません。忘れたんじゃないかと、わからないんです。とは流石に言えない。

「魔物はな、危険なんだ。人間が自分の縄張りにやっつけてくりゃ、容赦なく襲う。逆に言えば、縄張りにさえ入らなきゃ安全ってことになるんだが一概にそうとは言えねえ。はぐれたり、食料がなかったりすりゃ、人間の住む場所にやってきて人間も襲う。魔物ってのはそういうやつらだ。姿形もいろいろでな。地を駆ける奴もいれば、空を飛ぶ奴もいる。水の中にもいるらしいが……オレは見たことがねえ。普通の人間にや、相手は無理だ。ちゃんと鍛えた奴か、魔法使える奴が何人かで組んでやらねえと死人が出る。中には一人でやる奴もいるが、まあそりゃ特別な人間だな」

えーと。

まとめるとつまり、ここは見た目通り日本ではあり得ないわけで。

しかも地球と基本的な部分が違っていて。

日本で言うならいわゆるファンタジー系なアレってことで。

おまけに魔法という言葉まで話に出てきたということは、放置した例の【魔法基礎読本】は実際に役に立つ代物だった、と。

なんかゲームとかでよくある展開になってきた気がする。

「うわぁ」

そう考えたらちょっと鳥肌が立った。

もちろんあり得ないだろ、という方向で。

いや、心も少しは躍ったけどね。

それでも平凡で平穏な日々を満喫したがっていた人間としては勘弁してください、な展開だ。

かといって自分の身を顧みれば、すでにそれが回避できる状況でもないのは明らか。

「つまりはここで生きていくしかない、と」

僕の容姿はすでに【橋本誠也】ではあり得ない。

目の前で心配そうな顔つきの両親の子供。【ダット】でしかないわけで。

未だ納得いかない部分はあるものの、そういうもののだと受け入れなくては生きていけそうになかった。

ただ、この二人にはなんだか申し訳がないような気がしてならな
いけれど。

「なんとなくわかった、かな」

「そ、そう？」

「二人がお父さんとお母さんで、僕がその子供。お母さんは専業主婦で、お父さんは自警団の副団長。町の外は危険な魔物がたくさんいる」

まずは、ここまでわかればなんとかなる。

あとは徐々に色々覚えていけば、この世界でも生きていけるだろう。

そのための努力は多分必要だけど。

でもその前に。

「ダッター！」

「ちゃんと思いで出してね」

どうやらこの両親には抱きつき癖があるらしい。

これを改めてもらわなければ、知識を得る前に死にそうだった。

とんでもない一日だった。

転んで頭を打って目が覚めたら異世界なんて、漫画の世界だけだ
と想っていたことが実際に起こるなんて誰が思うものか。

僕自身が望んだ平穏で平凡な毎日がいきなり消え去ってしまうな
んて悲しすぎる。

だからせめて夢の中だけでは平穏で平凡であって欲しかった。
欲しかったんだけども。

「こんにちは」

どこに立っているのかわからないような真っ白な夢空間。

そこでの僕はちゃんと二十歳の【橋本誠也】で。けれど、目の前
には十歳の少しおっとり顔の【ダット】が立っていて。

「あれ？」

なんでこんなことに。

いや待て、整理しよう。

これは果たして本当に夢か。

「夢、だよ。ぼくらは眠ってる」
そうかそうか。

じゃあ、目の前にいるのは。

「ぼくはダット。おにいさんも、そう」

「いやいや。僕はちが……ん？」

あれ、今僕声に出してたかな。

「ううん。出してないよ。でも、ぼくはおにいさんと同じものだけ

ら。考えてることは全部わかる」

「うわあ。それってヤバイ。」

全部筒抜け。隠し事不可能。妄想も……いや駄目だな。相手は十歳。危険すぎる。」

「うん。でもどっちもぼくだからあんまり関係ない、かな」

それはそうかもしれないが、って。」

「待って待って」

今、聞き捨てならないことを聞いたような気がする。」

ダット少年よ。まず聞こう。」

「君は誰かな？」

「ダットだよ。正確には今のおにいさんが忘れてる、この世界に生まれついた【ダット】の十年間の記憶、だけ」

はい、爆弾発言来ました。」

っていつか待って。何ソレ。」

「……わからなくは、ないはずだけど」

ダット少年はきよとんと僕を見上げる。」

「おにいさんもなんとなく気が付いているはず」

「何を」

「だって、いろいろ考えてたでしょ。自分はその大雨の日に転んで死んで、生まれ変わったんじゃないのかとか、死んで違う世界の

【ダット】に憑依しちゃったんじゃないのか。って」

「あ……」

そう。確かにそれは考えた。」

本物のダットはどこへ行ったのか。もしかして追い出したのかもとか。

あまりにもオカルトじみた発想だけど、実際そうだとしたら本人にもその両親にも謝っても謝りきれない罪を犯したことになる。」

そりゃ罪悪感でいっぱいにもなるわー。」

しかし、目の前には【ダット】と名乗る少年がいて。」

「実はね。どっちも正解と言えば正解」

「……は!？」

二度目のトンデモ発言をしてくれた。

「本当に死んじゃったのかはぼくにはよくわからないけど、確かにぼくは生まれて十年間ここで過ごした。向こうの世界の記憶はなかったけど。でもね、ずっと違和感を感じてた。きつとそれがおにいさんだったんだね」

ダット少年はそう言って僕を指示す。

「どうしても、この世界が不自然に見えて仕方なかった。この世界は自分がいる場所じゃないって思ってた。お父さんとお母さんも好きだし、友だちだっているけど。でも自分だけ取り残されてる感じがして。疎外感っていうのかな。こういうの」

難しい言葉知ってるね。疎外感。十歳なのに。

思わず心の中で茶々を入れてしまったが、ダット少年見事に無視

あ、うん。疎外感感じたよ。今。

でも、ダット少年の次の言葉に遊んでいる場合ではないことに気付く。

「ずっとそう考えてきて、考えて続けて。そしたらこうなったんだ。わかる？」

彼が押さえたのは自分の後頭部。

その姿に、僕ははっと我に返った。

まさか。

「頭を打って、思い出した？」

「正解」

ダット少年が笑う。

「【橋本誠也】だった過去をね。それで思い出したんだ。でも打ち所が悪かったせいで【ダット】の十年間が飛んじやったみたい」

だからあの医者言う記憶喪失も正解なのだとダット少年は言う。

「それが、僕？」

「うん」

まさになんてこった。だ。

けれどこれで少し納得もいった。
つまり。

「最初に言ったように、ぼくはおにいさんと、おにいさんはぼく。ぼくは【橋本誠也】の記憶が戻ったことで違和感の理由がわかってすつきりしたし、多分おにいさんもどうして自分が【ダット】なのかこれではつきりしたんじゃない？」

……確かに、そういうことなら大部分の疑問が解消される。

が、それでも納得いかない部分についてはどうだろう。
例えば。

「ここ日本じゃないよな」

「うん。ここはジードリクス王国のカーライル。ニホンって国は聞いたことない」

「どう見ても生活水準が二十一世紀とは思えないんだけど」

「向こうにあったものはほとんどないって思った方がいいかも。キカイとか。その代わり魔法があるよ」

その時点で紛れもなく別世界判定チェック付けないと駄目よなあ。
やっぱり。

「魔物もいるし。その認識でいいと思う」

でも、僕が一番に疑問なのはソコじゃない。

「普通、生まれ変わるって言ったら同じ世界だろ」
そう。コレだ。

輪廻転生とかそういう話は、宗教というか、昔話というか、日本でも色々あるし珍しくない。

だけど、こんないきなり異世界で生まれ変わるとか思わない。

まあ、そもそもが普通こんな記憶があって生まれ変わってるとかいう自体があり得ない状態なんだけどさ。

「受け容れられないって思ってる？」

ダット少年が少し困った顔で僕を見上げる。

う、そんな悲しげな目で見るのはやめてほしい。

「な、納得いかないだけだよ。それだけだから気にするな」

っていつか、なんで僕。自分で自分を慰めるような真似しないといけないんだろう。

「でもそれ、明らかに拒否してるよね」

あ、突っ込まれた。

「やっぱり、向こうの世界の方がよかった？ 帰りたいの？」

「それ、未練があるかどうかってことか？」

「うん」

はつきり聞いてくるなあ。ダット少年。

「まあ、普通に平凡に生きられたら満足だっと思ってたし。その目標に達する前に死んだのはちょっと微妙」

せめて、彼女作って結婚して子供と遊ぶ……ぐらいのことはしたかった。

考えていることが筒抜けだから、ダット少年に呆れられたけど。

「ちよつとつていつか、未練がいつぱいあるみたいに見える。贅沢うるさい。それぐらい夢見てもいいだろうが。」

「……悪いとは言わないけど。でも死んでるから、意味ないね」

おい。何気なく発言に棘あるな。ダット少年。

「だって、今この世界で生きてるのはぼくだもの」

「う、そうだった」

言うまでもなく【橋本誠也】はすでに死んだ身。主導権が【ダッ

ト】にあるのは当然のことだと今さらながらに気が付いた。

ダット少年。僕が悪かった。

現状を否定するのは、自分を否定することに等しいとやっと気付く。

「でも、おにいさんもぼくだから。気持ちはずちやんとわかってる。

だから、おにいさんの希望通りにはいかないかもしれないけど。ぼくもちゃんとぼくが生きたいように生きるよ」

それが前世である僕へ向けて出来る唯一のことだから。

最後の言葉は口には出ていなかったけれど、ちゃんと伝わってきた。

まあ、ダット少年が言うように彼も僕だから出来る芸当なわけだ
けど。

「あ、そろそろ起きないと。おとうさんとおかあさんに心配かけすぎたから。あやまらなきゃ」

ダット少年が僕に向かって手を伸ばす。

「……そだな。僕、思いつきり失礼なこと言ったし」

誰、とか。敬語で喋るとか。

あれは正直あの時点でも泣かせすぎたとちょっと反省してる。

ここはやはり、きちんと謝らないといけない。

「行こうか」

僕の手が、差し出されたダット少年に触れ。

夢の世界は消失した。

謝罪と決意

日が昇り、朝日が差し込む部屋の中。

「ごめんなさい」

包帯を巻いた僕が頭を下げたことに、きっと両親は驚いたことだろう。

朝の「おはようございます」の直後である。そこで誰が息子の謝罪を聞くと思うだろうか。

うん。きっと僕がその立場でも驚くと思う。

ごめんね、ホント。混乱させて。

でも、きつとこれから話すことは更に二人を混乱させるに違いない。

だからこれは、それを含めての謝罪だ。

まだあまり動かない方がいいとベッドの上に座る僕に、二人は困惑した顔で話しかけてきた。

「だ、ダット。どうして謝るの？」

「そつだぞ。なんでいきなり」

あ、なんかまた母さんが泣きそうな顔をしている。

昨日の今日だもんなあ。更におかしくなっただんではと心配されても仕方ないかも。

これは早くフォローした方がよさそうだ。

「違うよ。その、ちゃんと思い出したんだ。僕が父さんと母さんの子供だったこと。だから」

「え……？」

「心配かけてごめんなさい」

ぼかん、とただ僕を見つめる二人にもう一度頭を下げる。

両親が息を飲む音が聞こえた。そして、数瞬の間呼吸音も消える。

まるで時間が止まったかのような感覚。

ふう、とまるで呼吸を忘れていたかのように息を吐き出したのは母さんだった。

「え、あ。思い、出したの？」

「じゃあ……？」

「うん。記憶喪失はおしまい」

下げていた頭を上げてにこりと笑ってみせれば母さんの目に涙が溢れた。そのまま父さんに向き直り、二人は顔を見合わせる。父さんの方は……少し厳しい表情だったけど。多分それが、次の行動に繋がったんだろう。

お互いの顔を見て安心したのか、母さんが今にも抱きついてきそうな勢いで僕の方に体ごと向き直る。

けれど。

「待て。キーラ」

父さんがそれを止めた。

その時の顔は厳しい印象に似合いと言っては失礼だが警戒感に満ちていて。

「喜ぶのはまだ早い。ちょっとは疑え」

母さんを諫めていた。

流星は自警団に勤めていることだけはあ。

気付いたかな。

でも母さんと言えば、なぜ止められるのかわからない様子で父さんを見上げている。

「ガリオ？」

「見た目に騙されるな。どうもおかしい」

鋭く僕を睨みつけた父さんは母さんを自分の体の後ろに回す。その目は得体の知れない何かを感じ取っているように見えた。

まあ、中身がちょっと変わったちゃってるから、この反応は正常と言えば正常なんだろう。

むしろ疑わなかった母さんが軽率だったわけだけ。でも、動揺

してる様子だったし、この辺はやっぱり夫婦だから父さんがフオロ
ーしてるわけだけど。

「剣を持ってくるべきだったか」

「ちよっ!？」

でも待つて。それは物騒だから待つて!

自警団の一員らしい発言ではあるけれど、それはまだ早いから!

「ガリオオ!」

ほら、お母さまもびっくりしてますから。また泣きそうになって
るから!

せめて話を聞け、と僕は慌てて口を開いた。

「父さーん、僕魔物じゃないよ?」

「ふん。証明が出来ると?」

冗談半分に言ったソレに、即座に返答した所を見るとどうやら僕
は魔物か何かだと思われてるっぽい。

失礼な。前世でも人間やってたんだ。と言いたかったけど、現時
点でそれを言うのは無謀っぽい。

それならそれで、別の方法を取るまでだ。

僕が【ダット】であるという証明。

決定的な証拠を突きつけてやる。

「十日くらい前だっけ。旅の傭兵の色っぽいお姉さんにチューされ
てたよね。確か」

効果は抜群だった。

一瞬の間の後。

「え……?」

母さんが父さんの背後から「今の発言はなに?」と目を何度も瞬
かせながら顔を出す。

父さんは、僕が発言した瞬間にはみっともなく口を開けて固まっ
ていたが、すぐに我に返ると。

「お、おい待て」

と、慌てだした。

母さんに対する後ろめたさが、そうさせたに違いない。

何を言っているんだと言わんばかりに父さんが僕を見ているけれど、証明しろと言ったのはあなたですよ。

だから、僕と父さんしか知らないようなことを言うのが一番なんです。申し訳ありませんが、大人しくトドメを刺されてください。

母さんに。

「僕が見てるの知って、慌てて離れてたけど。母さんに内緒だった餡買ってくれなかったっけ？」

「わ、馬鹿。ダット!？」

「……………ガリオオ？」

うん。この言葉がこの世界にあるのか謎だけど。この時の母さんの顔は幽鬼のようだったとだけ言っておこう。

合掌。

すっかり話が逸れてしまったわけだけけど。

父さんが本来彼より弱いはずの母さんに打ち負かされる光景を見終わると、ようやく落ち着いて話が出来そうな雰囲気になってきた。

「まず、父さんが気になってることだけど」

警戒心がまだ完全に抜けたわけでないことは、父さんの引き結んだ唇からも見て取れた。

母さんはその隣で自分の腕と父さんの腕を組み合わせて不安そうに僕を見ていた。

「たぶん、僕の口調が変わったから警戒してるんだよね」

前世の記憶が戻る前。

彼ら二人を呼ぶときは「おとうさん、おかあさん」と呼んでいた。しかもこんな風にしっかりとした口調で話したことはなかったから、父さんがそれに警戒感を露わにしても何らおかしくない。

外から見れば、それこそ人が変わった。別人になったと言われるような状態だ。

たぶんそれで剣を取ろうとしたんだろう。
もしものことを考えて。

「【魔物憑き】」

僕が呟いた言葉にびくり、と母さんが反応する。父さんの眉が動いたのも僕の目はしっかりと捉えていた。

「かもしれないって思ったんだよね」

「……そうならば、殺すしかないからな」
だろうと思った。

【魔物憑き】とは文字通り魔物に取り憑かれた人間のことを指す。この世界には幽霊のような肉体を持たない魔物も存在していて、武器は用を為さず、魔法でしか消滅させられない。

しかもその食料は人間や魔物の【生氣】。そしてそれを奪われた生き物は、例え一時生き延びようとも必ず死に至る。

そんな魔物が人間に憑くとどうなるか、逸話は山ほどある。

例えば村一つ滅ぼされたとか、一国の王様がそれで殺されたとか、それで危うく戦争になりかけたとかだ。

子どもを脅かしたりする教訓とかにも使われるので僕も他にいくつかは知っている。ちよつとトラウマになるくらいには。

ちなみに、取り憑かれた人間は見た目はみんなと同じだから、気付かれにくい。

ただ、人が変わったようになるので近しい人間なら妙だとは感じるそう。

父さんが僕に対して警戒感を持った一番の理由はこれだろう。間違いない。

「でも僕死んでないし」

心臓は動いているし、体も温かい。

【魔物憑き】になった人間は真っ先に【生氣】を奪われて死者となるから、ここはしっかり否定しておかなければいけないところだ。

はい、と手を伸ばすと父さんがなにやら慎重に構えた。
うん。警戒するのわかるけどさ。

「昨日思いつきり抱きしめておいてそれはないんじゃないの？」
それこそ死にかけるくらいまでやられたのに今更だってば。

「む……そうだったか？」

ああもう、白々しいつ。

それでもまだ油断ならなと思うているのかゆっくり差し出され
たごつごつした手。それを僕は思いきり力を入れて掴んだ。

ほらあつたかい。

僕が睨むと難しい顔をされた。

そうだろうね。じゃあ、なんでだっって感じになるよね。

「僕がこうなつた理由、これから話すよ」

多分【魔物憑き】の方がまだ理解しやすい話だろうけど。

ひとつひとつ丁寧に話してもいいけど、それだと時間がかかりす
きる。

わからないところは聞いてもらえばいいわけだし、信じてもらえ
ないときは……あ、どうしよう。

そこまで考えてなかった。

「ダット？」

急に考え込んだ僕の耳に母さんの不安げな声が届く。

まいったな。昨日からこんなのばかりだ。ちよっと嫌気がさす。
家族なのに。

「ああ、うん。とりあえず聞いてもらってそれからだね」
後のことは後のこと。

僕はそうして口を開いた。

「僕はね。前世の記憶があるんだ」と

謝罪と決意（後書き）

10/8 少し修正かけました。

家族と安堵

前世ではこことは違う理の場所で生きていたこと。
頭を打って死んだらしいこと。

そしてまたこの世界で頭をぶつけてそれを思い出したこと。
全てを話し終えて両親が取った行動は。

「「はあ」「」

何故かため息だった。しかもダブルで。

え、何で？

そこでどうしてため息がでるの。しかもさも呆れたように。

僕が意を決して話したっていうのに、この反応はどう取っていいの
のかこちらも困る。

しかも第一声は。

「なんだか、心配して損をした気分なのはなぜかしら」

「あれだけ気を遣って来た原因がコレとはなあ」

……ナンデスカ。ソレ。

「え、と。父さん。母さん？」

なんとなく理由を聞くのが怖いけど、聞かないと多分話が進まない。
い。

恐る恐る問いかける。

「今の話、わかってて言ってる？」

自分の子供が実は別世界の人間の生まれ変わりでした。っていう
結構ハードな話だったはずだけど。

二人は夫婦らしくお互いに通じ合った絶妙なコンビネーションで。

「そうね。正直なところ、まだ戸惑っているんだけど」

「ああ。信じられんと思うところもないわけじゃない。だがなあ」

「ねえ」

顔を見合わせて、またため息を吐いた。

ねえ。ちよっと待って。だから何なの、そのため息は。

そんな僕の心の声はどうやら顔に出ていたらしい。

母さんは自分の頬に手を当てて、父さんは肩を落としつつ、なんとも言えない表情でこう言った。

「だって、ね。前世なんて言うからってつきり女性を巡って命を懸けた決闘があったとか」

「戦場で華々しく散ったとかそういう話じゃないかと期待してたんだが」

……………あれ？

ちよっと待って。何ソレ、って。

「雨の日に滑って転んで頭打ったじゃなあ（ねえ）」

見事に揃ったハーモニー。これぞ夫婦の絆がなせる技か。

イヤ、違う。激しく違う。

ソレ、なんか考えるトコ違わくないですか？

さっき僕が話したのはもっと重大な事だったはずですが。

「うちの子はそんなに間抜けだったのかと思うと……………はあ」

いや、だから、ってまたため息吐いた上にハモってるし。

すごい秘密を暴露しました。って気分だったのに。台無し。

言いたいことはわかるんだよ。すごく。

雨で、水たまりで、滑って転んだのが原因なんて、そりゃ僕だって呆れる。

そんな死に方が間抜けだったことぐらい嫌というくらい承知してる。

でもさ、まさか僕が前世持ちだったっていう事実より、死んだ原

因の方に食いつくとは思わないし。

しかもその間抜けさを実の両親に面と向かって言われるのも結構凹む。

……気持ち悪がられるよりは、マシなんだけど。

「とりあえず、お前の言いたいことはわかった」

ちよつと泣きたくなってきたところで、落胆の表情を隠さずに父さんが声をかけてくる。

「まあ《魔物憑き》じゃないならそれでいい。実際は二十歳も過ぎてるのかも……その話し方なら納得できないこともない。異世界から来たらしいというのも、信じがたいが多分本当なんだろう」

「え？」

「お前、時々寝言で俺たちの知らない言葉を呟いてたからな。起きてるときもぼーっとしてる時とか話しかけたら使ってた。俺が傭兵として旅をしていた時でもあんな言葉を使う人間はいなかった」

え、僕そんなことしてたんだ？ 記憶にないけど。

それは初耳。と目を丸くするとぼん、と頭を撫でられた。

「多分無意識に、だったんだだろうが。記憶がなくても、ちゃんと心にはそれが残ってたんだな」

父さんの言う通りかもしれない。

この世界で生まれてからの十年の間に感じていた違和感。

それが僕自身の前世。異世界のことだったわけだから、無意識にそつちの言葉を使っても不思議じゃない。

今だからわかることだけど。

でもそうか日本語か。長らく使ってないし、使う予定もないだろうけど。でも寝言でも喋ってたってことはもしかして使える？

思い立ったままに、口を開く。

『ぼくーが、使ってたの、てこーい言葉だた？』

あ、意外とはつきり発音できた。

微妙におかしいけどそれは発音の仕方に慣れてないからだろう。舌の使い方とか違うし、外国人が喋ってるみたいだ。

実際今はそうなんだけども。

今言ったそれを今度はこちらの言葉で父さんに聞いてみる。

「うーん。まあ、そんな感じが」

寝言でしか聞いてないし、意味も意味もわからないからあまり自信がないらしい。

だけど、この世界で生きるなら使わない言語なわけだし、特にわからなくても問題は無いは……「ぐうー」……ず。

おっと、これは。

「「「あ」「」」

うっかり親子三人の声が八もった。

視線の中心にいるのは、僕でそのお腹。

「……お腹空いた」

まあ、朝ご飯も食べずに話し込んでいけばこういうことも起こるわな。

恥ずかしいけど。

「あらあらあら。大変。すぐ支度するわね。あ、ガリオ。今日は自警団の仕事は？」

「あー、一応休むかもしれないとは言ってるがあるが、ダットがこんな感じなら行ってよさそうだなあ」

あっという間に日常会話に立ち戻ってしまった。

「僕、手伝おうか？」

あまりにもいつも通り過ぎて思わず申し出てしまったが。

「怪我人は大人しく寝る！」

怒られてしまった。

そうだった。頭打って記憶喪失になってたんだった。

微妙に痛む後頭部を撫で、苦笑する。

両親が去り、すっかり静かになった部屋の中。

「よかった」

ベッドに横になった途端安堵のため息が出て、僕は目を閉じた。そのまま昼まで眠ってしまったのはご愛敬である。

家族と安堵（後書き）

第一章終了です。閑話（母視点）を挟んで第二章開始。

閑話 母の不安

わたしの息子のダットはちょっと他の子どもたちとは違って、ひとことと言つと、ぼーっとしていることが多いおっとり系な子ども。人と喋ることが得意ではないけれど、それでも子ども同士で遊んでいるときはちゃんと喋るし笑いもする。

そんな子どもだ。

でも、ここまでなら普通の範疇に入るかもしれない。

わたしの言う他の子どもたちとの違いは別にある。

例えば、彼が一人にいる時。

ふとした瞬間に、中空を見上げて何かを呟く。

すぐ側でそれを聞いたことはないけれど、唇の動きを見ればそれがわたしが知らない言葉だというのはすぐにわかった。

そして、そういう時のダットはとも子どもとは思えない切なげな表情を浮かべている。

ここではないどこかの事を思っているらしいことは遠目からでも感じ取れた。

そんなとき、わたしはつい思ってしまう。

いつか、この子がどこか遠くへ行ってしまふのではないか。と。

そんな恐怖が、いつもわたしの胸の奥底に渦巻いていた。

ダットが物心ついたときからそんな子どもだったから、わたしはいつもその姿を追っていた。

目が離せなくて、ダットが子どもではない目をする度に抱きしめるようになった。

ダットに友だちが出来たのは四歳を過ぎてしばらくしてからだ。

特異な子どもだったから、その辺りは不安だったけれどダットが自分からわたしに「友だちができた」と言ってくれた時にはとても

嬉しかったのを覚えている。

それから、だろうか。

ダットが一人で空を見上げることは減った。けれどそれが全部なくなることはなくて。

印象的だったのは、ダットの五歳の誕生日の翌日だった。

その日は大雨で、雷も鳴って家から出るには危険なため、ダットとふたりで自宅に籠もっていた。

ダットは意外と性根が据わっているらしく、雷を怖がらない。

むしろ興味があるようで、窓の前で光を放つ空を見上げていた。

「ダットは雷が好き？」

それは何気ない問いかけだった。

その直後、わたしは後悔することになる。

ダットは振り返ってにこりと笑うと、まるで昔を思い出すようにこう言ったのだ。

「うん。なつかしい」

この時のダットも、五歳の子どもとは思えないような顔をしていて、わたしはただ「そう」と呟いて抱きしめているしか出来なかった。

この子は一体、何を背負って生まれてきたのだろう。

はじめてそんな疑問がわたしの中を過ぎった。

わたしが今まで以上にダットに構うようになったのはこのときからだと思う。

ダットがわたしの子どもだということを強く刻みつけるように抱きしめ続けた。

七歳を過ぎた頃からは恥ずかしいとすぐに逃げられてしまうようになったけれど。

夫であるガリオも、ダットの奇妙さを間近で知っているのでもわたしの行為をを咎めることはなかった。

むしろ、わたしと同じように積極的にダットと触れ合おうとしている。

自警団の副団長をしているガリオは夜中近くに帰ってくることも珍しくない。けれどダットをとっても愛していて、帰ってくると必ずダットの部屋に寝顔を見に行く。

そしてたまにダットが寝言で彼の知らない言葉を呟くのを何度も聞いているそうだ。

ガリオはわたしと結婚する前、旅の傭兵だった。いくつも国を渡っているんな国の言葉を知っているけれど、ダットが寝言で呟くその言葉はどれにも当てはまらないとか。

一体どんな夢を見ているのか。

不思議に思っただけでそうとは言わず、何度かダットに夢のことを聞いてみたけれど覚えてないと首を振られた。

そして、十歳を迎えて事件は起こった。

家の中で、ダットとわたしは不注意からうっかりぶつかってしまったのだ。

その結果、ダットは後頭部を強打。

わたしはダットの体の上に馬乗り状態。

ダットの目は中空を見つめており、焦点が合っていない状態だったから慌ててしまった。

「やだ、ちよつ。大丈夫？」

声をかけ、顔を近づけてのぞき込むとなぜか慌てて顔を逸らされた。

そして複雑そうな顔で。

「えー。ヘイキなので。とりあえず僕の上からどいて頂けませんでしょうか？」

やたらと丁寧をお願いされる。

わたしはいつもとまったく違う言葉遣いに戸惑った。

「どうして敬語なの？」

その時はよもやあんな言葉を投げかけられるとは思ってもしなかった。

「お姉さん、誰？」

頭が真っ白になった。

そこから先はよく覚えていないけれど、ダットをベッドに押し込んで、お医者さまを呼んで、更にガリオへ伝言を頼んで。

その果ては。

「はい、君の名前は？」

「橋本誠也」

「年は？」

「二十歳」

「出身地は？」

「……日本だけだ」

息子の口から飛び出したのは知らない名前、あり得ない年齢、そして聞いたこともない土地の名称。

頭が真っ白になって、わたしは泣いた。

お医者さまの診断は記憶喪失。

それにしても、奇妙な名前を名乗っていたようだったけれど。お医者さまにもそれはわからないと言われた。

でも、わたしやガリオのことはすっかり忘れてしまっているし、自分の名前や出身地のことも全部聞いたことのない別の名称になっていたので、そうなるかと記憶喪失だと診断するしかないとのこと。

正直、母親なのに知らない人間扱いされるのは辛い。

しかも、自警団から帰ってきたガリオにも同じような反応をするのだ。

まるで別人になったみたいだった。

本当に、どうしていいかわからない。

頭に包帯を巻いた痛々しい姿。そして記憶の喪失。

涙を堪えることなど出来ずに、泣いた。

お医者さまは、頭を打って一時的に混乱しているだけかもしれないと何日か様子を見るように言って帰っていった。

いつ思い出すかもわからないけれど、出来るだけいつも通りの生活。

お医者さまの指示従おう、とわたしもガリオもその夜誓った。

けれど、翌日。事態は急展開を迎える。

そう。思いも寄らない方向に。

朝起きて、夫婦でダットの部屋に入った途端いきなり頭を下げられ謝られた。

「ごめんなさい」

なぜそんな風になるのかわからなくて、ガリオと顔を見合わせる。

「だ、ダット。どうして謝るの？」

「そうだぞ。なんでいきなり」

なんだか嫌な予感して、緩くなった涙腺から滴が落ちかける。

するとダットが慌てて。

「違うよ。その、ちゃんと思いついたんだ。僕が父さんと母さんの子供だったこと。だから」

「え？」

それは思ってもみない喜ぶべきことで「心配かけてごめんなさい」と再び頭を下げるダットが信じられなくて、思わず問いを発していた。

「え、あ。思い、出したの？」

「じゃあ……？」

「うん。記憶喪失はおしまい」

きつぱりと断言されたその言葉にガリオと二人、顔を見合わせる。記憶喪失の終わり。

それはまさしくわたしが望んでいたダットが戻ってきたということ

と。

わたしは喜びから今度こそ涙がこぼれ落ちさせた。

これで全部元通りなのだと思うと体が自然に動いた。ダットを抱きしめたくて、行動に移そうとしたその時。

「待て。キーラ」

ガリオがわたしの前に立ちふさがった。

「喜ぶのはまだ早い。ちよつとは疑え」

「ガリオ？」

彼が一体何を言っているのかわからずに、わたしはただガリオを見上げるしかなかった。

「……見た目に騙されるなよ。どうもおかしい」

そう言うとわたしの視界から、ダットを隠してしまう。
なに？ どういうことなの？

ガリオは冗談でこういうことをする人ではない。

それがわかるから余計に混乱した。

「剣を持つてくるべきだったか」

「ちよつ！？」

「ガリオ！」

物々しい雰囲気を纏い始めた夫をわたしは信じられない思いで見つめた。

何が起こっているのか理解できない。ただ、夫が子どもに剣を向けようとしたことだけはわかる。

その口調は冗談でなく、本気だ。

「父さーん、僕魔物じゃないよ」

「ふん。証明が出来るか？」

状況を飲み込めないわたし一人を置いて、二人は向き合い言葉を交わす。それも最も最悪な方向に、だ。

魔物。

この世界で最も危険で最悪な存在。

どうしてここで魔物なんて名称がでるのだろう。

待つて。ガリオ。それはどういうこと？

答えを知っているのに、それを出すことが出来ないのはそれを考えたくないから。

そんな殺伐とした空間に風を入れたのはダットだった。

「十日くらい前だっけ」

笑いを含んだ明るい声が部屋を巡る。

「旅の傭兵の色っぽいお姉さんにチューされてたよね。確か」

「え……？」

空気が変わった。

ダットが見上げているのはガリオで、ガリオの気配が戸惑ったものに変化した。

「お、おい待て」

ガリオが慌てて首を振る。

わたしはふと、ガリオを見上げる。顔色がおかしい。

何かおかしい。

たった今ダットの口からもたらされた情報にわたしは疑問を覚えた。

旅の傭兵の色っぽいお姉さん？ しかもチュー！

何ソレ。わたし知らないんだけど。

「僕が見てるの知って、慌てて離れてたけど。母さんに内緒だった餡買ってくれなかったっけ？」

「わ、馬鹿。ダット！？」

ガリオの態度が明らかにおかしい。

「……………ガリオ？」

どういうことかしら。説明が欲しいわ。

旅の傭兵の色っぽいお姉さんと何を話してたのか教えて？

そんな気持ちを含めてガリオを見上げたら、泣く子も黙る厳しい大男が面白いくらい顔面蒼白になっていた。

ええ。もちろんしつかり説明を聞かせてもらいました。

昔取った杵柄で助言したらお礼にキスされたとか。

それをダットが目撃して、内緒にするようお願いした？

ふふふふ。

素直に言えば少し嫉妬するくらいで済んだのに、息子に秘密にするようお願いするなんて何かやましいことがあったとしか思えない。当然その辺りもきっちり説明させました。

話が思い切り脱線したことに気が付いたのは、ガリオが愛玩用の獣のように部屋の隅で縮み上がってから。

そしてこの件がもしかしたらダットがわたしたちを気遣って出した話題だったのかも知れないと思ったのは、全ての話を聞き終わってからだった。

その後も話は続いた。

ガリオはどうやらダットを【魔物憑き】ではないかと疑ってかかっていたようで、わたしはそれを聞いた途端背筋が凍った。

【魔物憑き】の逸話は捜せばいくらでも出てくる悲劇の話だ。

そうなった時点で憑かれた人間は死ぬ。

そしてその体は【精气】を求める魔物によって操られ、その身を滅ぼされるまで彷徨い続ける。

ダットの記憶喪失がもしその結果だったら？

それを考えると肝が冷えたが、ガリオが確認して違つと知れた。よかつた、と胸をなで下ろしたのも束の間。

ダットの口から漏れた言葉の数々は一概には信じがたいものばかり

りだった。

「僕はね。前世の記憶があるんだ」

一体何を言っているのか最初はまったくわからなかった。

多分、ガリオも同じだったはず。

「前、世？」

「あ、そういうの。こっちではわかるのかな」

「それは生まれ変わり、というやつか？ 人は死ぬと、ある場所へ招かれ、そしてまた人となる。確かどこかの国でそんな概念があると昔聞いた覚えがある」

「流石父さん。うん。そういう認識で間違いないよ」

父と息子で話が繋がって流れていく。

その話ならわたしも知っている。以前ガリオがわたしにも話してくれたことのある話題だ。でも残念ながらこの国にはそういう概念は存在しない。

少なくとも死者は死者であり甦ることはない。とされている。

死んだら終わり。

これが常識で、例外があるとすればきちんと埋葬されなかった死体の主は実態のない魔物になるという程度のもの。

だから、ガリオからその話を聞かされてもピンと来なかったのを覚えている。

それなのに、今ここで息子のダットが自分はソレだと言う。

「そう簡単には信じられないとは思うけど。僕は昔【橋本誠也】という名前の人間だった。年だって二十歳になったばかりで、勉強してて将来は教師になるつもりだった。でも、死んでしまっ。気が付いたら僕は父さんと母さんの子どもだったんだ」

わたしはその話にただ口を開けているしか出来なかったのだけだ。ガリオはちゃんとダットの話聞いてくれていた。

「つまり、お前はその前世の記憶がある、と？」

「うん。そう。僕は【ダット】以外にもう一つ【橋本誠也】っていう記憶を持つてる。最もそっちの方は完全に過去の話で、今はちや

んと父さんと母さんの息子の【ダット】だよ。前世の記憶戻っちゃったからしゃべり方はこんなだけだ」

あ、と思わず声に出す。

そこでやっとなわたしはダットが今までのダットではないということに気が付くことが出来た。

本当ならもっと早く気付いてもいいはずだったのに。

いや、本当は気付いていた。

今ダットの話の中に出てきた名前は、ダットが記憶喪失になった直後に出てきた名前だ。

困惑して、混乱して、泣いてばかりだったために判断力が鈍っていたのだろう。

ようやく繋がった。

冷静になってよくよく見てみれば、以前と違う表情なのはすぐに気付けたはずなのに。

大人のように見えて子どものような顔にもなる。不思議な雰囲気だ。ダットの周囲には満ちていた。

それは以前からダットがしていた表情にもよく似ていて、わたしはそうかと頷いた。

ダットが他の子どもたちと違っていた理由はこれだったのだ。

「まさかこんな風に記憶が戻るとは思ってたなかった」

少しだけ目を伏せて微笑むその顔は、大人の顔。

ダットの言うことが全て真実なら、一体彼はどんな人生を送ってきたのだろう。そうしてなぜ死んだのだろう。

そう考えたら、聞かずにはいられなかった。

「以前いたところは、どんなところだったの？」

「あ、多分ことは全く違う世界かな」

ダットは少し懐かしそうに語り出した。

「全く違う世界？」

「そう。魔法なんて存在しないし、魔物もない。そんな世界だったよ」

なんてことだろう。

全く予想していなかった言葉が飛び出して、わたしもガリオも声が出せなかった。

魔法も魔物もわたしたちにとってはとても身近で危険なものだ。

それが、ない。

だとしたらそこは安全に暮らせるいい場所だということにならないだろうか。

そんなところにいたのに、ダットは二十歳という若さで死んだと言った。

一体どんな状況だったのだろう。

病気だったのか、それともそんな平和な世界でも殺伐とした殺し合いが存在していてそれに参加していたのか。考えればきりが無い。ダットの話は続く。

「代わりに機械っていう、魔法の代わりみたいな便利なものがあったんだ。人間の手助けをしてくれる道具ってところかな。そういうのを作る専門職もあつたりして」

それは道具を作る職人さんみたいなものかしら。

そう尋ねると似たようなものだと言われた。

「でも、さつきも言ったけど僕はその中で教師になりたくて勉強してたんだ。だけど多分、運が悪かったんだと思う。学費を稼ぐためにバイトしてたんだけど。帰りが大雨で、雷も凄く鳴ってた。傘を差しても全身が濡れるくらいに降ってたから、雨宿りして帰ろうと思つて道を歩いてたら、転けちゃって」

ははは、と恥ずかしそうにダットは笑う。

そして全く持つてわたしたちが思いも寄らない言葉を言い放った。

「多分、その時頭を打つて死んだんだと思うんだ」

それは完全に、予想の斜め上からの言葉だった。

頭を打つて死んだ？

わたしは呆然とし、ガリオもまた呆気にとられた顔で固まっていた。

けれどダットはそれには気が付いていない様子で。

「だから結局教師にはなれなかつただけだ。次に気が付いたらこの姿だつたんだ。頭を打って死んだのに、今度は頭を打って記憶が戻るなんて。そこは偶然なんだろうとは思っけどちよつと驚いた」それはそうかもしれないけれど。

「なんだか神妙に聞いていたわたしたちが馬鹿に思えてきて、少し頭が痛くなった。

まさか、死んだ理由がそんなことだつたなんて。

「「はあ」「

示し合わせたかのように、ガリオとわたしのため息がかち合う。なんてことだろう。

そこでようやくダットは戸惑つたようにわたしたちを交互に見た。これはわかつていない態度に違いない。

その様子が年相応の子どもに見えるので、それに少し安心しつつも。

「なんだか、心配して損をした気分なのはなぜかしら」

「あれだけ気を遣つて来た原因がコレとはなあ」
遠くを眺め、何かに思いをはせる切ない姿。

アレを見て散々やきもきしていたというのに、死んだという理由が『転けて頭を打つたら』なんて拍子抜けもいいところだ。

「え、と。父さん。母さん？」

恐る恐る、といった感じにダットが声をかけてくる。

まるで、ついさつき見たばかりのガリオのようなその態度にわたしは思わず「流石は父子」と少しばかり見当外れな感想をつけた。

「今の話、わかつて言ってる？」

ダットの言いたいことはわかる。これでも母親だもの。例え「前

世の記憶が戻りました」なんてことがあっても息子の不安げな表情は以前とそう変わらない。

ダットが打ち明けた話の内容だって、決して軽いものではないことも頭ではわかってる。

でも。

「そうね。正直なところ、まだ戸惑っているんだけど」

「ああ。信じられんと思うところもないわけじゃない。だがなあ」

「ねえ」

その最も重要な部分がうっかり『転けて頭を打った』では格好がつかない。

ガリオと顔を見合わせ、お互いに頷き合う。

「だって、ね。前世なんて言うからてつきり女性を巡って命を懸けた決闘があったとか」

「戦場で華々しく散ったとかそういう話じゃないかと期待してたんだが」

「雨の日に滑って転んで頭打ったじゃなあ（ねえ）」

語尾は違ったけど、見事にわたしたちのぼやきは重なった。

そしてそれは続く。

「うちの子はそんなに間抜けだったのかと思うと……はあ」

もちろん最後のため息まで一緒。

ダットはなんだか落ち込んでいる様子だったけれど、仕方ないわよね。これがわたしたちが感じた正直な感想なんだから。

あれだけ不安で仕方がなかったのに、今はなんだかおかしくて仕方ない。

そこにダットのお腹の無視が鳴って、自然と笑みが浮かんだ。

そうしてわたしたちはダットの部屋を出た。

ダットの部屋は二階。

わたしは朝食の準備のため、一階の台所へ。ガリオも自警団用の装備は一階に用意してあるので一緒に階段を下る。

けれど、和やかに済ませられたのはここまでだった。

いつもの生活が戻ってきたような気がしていたけれど、あることに気が付いたのだ。

にわかには信じがたい話を聞いて、でも嘘とは思えなくて、その中身にちよつと拍子抜けして。

それを真実と認めるなら、多分わたしたちには覚悟が必要になる。

「ねえ。ガリオ」

「うん？」

「大丈夫、よね。あの子」

明らかに他の人間とは違う。その特殊さを背負ってわたしたちの息子はこれからこの世界で生きて行かなくてはならない。

ダットはただでさえ他の子どもたちとは一線を画した雰囲気を持っている子どもだった。

他の子どもたちもそれは察していたようで、ダットの友人と言える存在は現在でもたった二人だけ。

それも子どもらしい部分があったからこそその関係が保っていたわけで「記憶を取り戻した」というあの状態は、その二人の友人すら遠ざけてしまいかもしれない。

けれど、それだけならまだいい。

ガリオが疑ったように《魔物憑き》だと思われる可能性もある。

もしそう呼ばれたとき、わたしはちゃんとダットを守れるだろうか。

以前のダットに対してでさえ抱きしめる以外のことは出来なかったのに、実際にそうなってしまうとき、わたしにはそう出来る自信がなかった。

「……キーラ。俺たちが出来ることは今までと同じだ。あの子の側で、あの子を支える。それだけさ」

「でも」

「大丈夫だ。あの子だってわかっている。それに、俺たちがその理解者になればあの子の負担はきつと軽くしてやれるさ。そう信じよう」

ガリオの鍛えられた大きな手が伸びて、頬に触れる。

「大丈夫だ」

髭に覆われた威ついと評される顔に笑みが浮かぶ。そのままわたしの顔の位置にガリオの瞳が降りてきて、わたしは静かに目を閉じた。

どうか、ダットに祝福がありますように。

唇に愛しいその人を感じて、わたしはただそう願った。

魔法の勉強を試してみた、の巻

両親に自分の秘密を暴露した翌日。

最低でもあと三日間は安静に。

往診にやってきた医者はその言うて去っていった。

頭の包帯は……まだ取っちゃ駄目だとか。

まあ、痛みもまだあるし、大きなこぶがまだまだ存在感を露わにしている状態だったりするから仕方ないかもしれない。

それに下手に動くと母さんに泣かれるし。

一度、寝てばかりじゃ体が鈍ると言ったら盛大に怒られた。

お願いだから安静に、と母さんに涙を浮かべられたら逆らえない。そんな僕に出来ることはベッドの上で大人しく本を読むことくらいで、だったらと手にしたのは記憶喪失中に一度目を通した【魔法基礎読本】だった。

魔法に関する基礎的な知識や、初歩的な魔法が、あくまでも子ども向けの挿絵つきで書かれている代物だ。

あの時は適当に読み物として頁を捲っただけで、まさか覚えられるとは思わなかった。

だからちよつと感慨深くなるのも当然で。

もし僕がゲーマー気質だったりしたならばきっと狂喜乱舞していたと思う。

ま、生憎そこまですらないけど。

苦笑いを浮かべつつ、興味半分で表紙を開く。

一度は目を通してあるので目次を飛ばし、早速【魔法を使うのに必要な物】と書いてある頁を開いた。

そこには魔法を使うのに必要とされるものが絵付きで三つ書かれている。

一つ目は【人の身に宿る魔力】。

これは空気中に存在する【魔素】と呼ばれる目に見えない粒子が人間の体内に入ることによって、発生するものらしい。

まずそれありき、なので魔法を使おうとする者が最初にするのはこの魔素を体内に取り込む練習だ。

が、ここで要注意。

魔法を使用するためにはそのための適正が必要で、これがないと最初の一步も踏み出せない。

僕が住むカーライルという町では十歳になると無償でその判定をしてもらえることになっていて、その判定で適正があると判断されれば【魔法基礎読本】が自動的に貸し出され、魔法の練習をするこ
とが許される。

つまり今この本を読んでいる僕には魔法使いになる適正があるってわけだ。

二つ目。

次に必要とされるのは魔力とは切っても切れない関係にある【魔素】と呼ばれるもの。

これに関しては前述した通りで【魔力の元】として知られている。空气中に大量に存在しているので呼吸するだけで少量ずつ体内に取り込まれ、適正がある人間ならば自動的に魔力に変換されるそう
だ。

ちなみに適正がない人間の場合は、魔素は魔素のまま体外に排出されるとか。

これはうちの両親が該当する。

そして三つ目。

最後の一つは【魔導具】。

魔素が結晶化した石【魔鉱石】に制御を示す【紋章】を刻みつけ加工したもので、魔法の方向性や威力を定めることを容易にし、魔法が使いやすくなる魔法のための補助器具だ。

ただし。

あくまでもこれは補助器具であり、実は【魔導具】がなくても魔法は発動する。

じゃあ、どうして【魔導具】が必要、とされているのかというと。

魔法の成功率を上げ、魔法の失敗や暴走、暴発を防ぐため。

これに尽きる。

ゲームだとカーソルで設定してあっさり魔法は発動するけれど、現実はそのはいかないみたいだ。

使う魔法に込める魔力を決め、方向性を定め、そして制御する。

この工程を経て、更に必要な【呪文】を加えることで魔法というもののは形を為す。

だからそれらを怠ると魔法そのものが不安定なものとなり、発動しない場合もあるが時に暴走や暴発という結果にも繋がる。とのこと。

特に魔法を覚えたての初心者には危険で、うっかり魔法のさじ加減を間違えたために危うく死にかけた。なんて話もあるらしい。

【魔導具】はそれを防ぐためにあると言っても過言じゃない。

まあ、魔法使って大怪我なんて洒落にならないから、「【魔導具】なんて必要ない」って言うような強者はいないと思うけど。多分。

僕もそんなのはごめんだから、【魔導具】はちゃんと持っているというか、この【魔法基礎読本】を貸し出された時点で両親が首飾りの形のものを買ってくれた。

今のところまだ使用する予定はないので、勉強机の引き出しの中にしまっている。

「ダット。いい?」

母さんの僕を呼ぶ声と扉を叩く音が重なる。

「なに、母さん」

本を開いたまま返事をする、扉が開いて母さんが少し困ったような顔を覗かせた。

「ライナちゃんとエイリクスくんがお見舞いに来てくれるけど、どうする?」

それは【ダット】の幼馴染み兼友人の名で。

「あー」

母さんの表情は曇りがちだ。

理由もわかる。

僕が前世を思い出しちゃってるから、引き合わせるのに不安があるんだろ?」

その心配も当然のことだ。

僕はもう前の僕じゃない。

だから、以前の僕を知る人はいきなり変わってしまった僕に戸惑うだろうし、下手をしたら父さんが最初に感じたように【魔物憑き】だと怖がられるかもしれない。

だったら前の僕のように振る舞えばいいとも思うけど、それだとどこかでボロが出て結局は駄目になりそうな予感がある。

そうやって相手を混乱させるより、最初から堂々としていた方が僕も気が楽になるというものだ。

流石に父さんや母さんに話したような内容をそのまま言うわけにはいかないから、多少ごまかしたりはすると思っただ。

「まだ具合が悪いから、って言って帰ってもらおう?」

「ううん。それはいいよ。会う」

「でも……」

「どうせ、このままずっと会わないわけにもいかないでしょ。適当に合わせてごまかすよ。だから平気」

賽は投げられた。

なんて格好つけても仕方ないんだけど、気持ち的にはそんな感じだ。

「心配してくれてありがとう」

お礼を言つと「無理しないでね」と抱きしめられた。

「うん」

ふわりと薫る花のような匂いが、心を落ち着かせてくれる。

「じゃあ、行くわね」

待ち人がいるからか、母さんの抱擁はすぐに終わった。

静かに扉が閉まり、僕は一つ深呼吸する。

あとはもうなるようになれ、だ。

騒がしくなるだろうこの部屋の近い未来。それを思って僕は顔を引き締めた。

幼馴染み、襲来

「よう、ダット。来てやったぞ！」

格好つけ気味の少年の声と共にその扉は勢いよく開かれた。

天井へ向けて真っ直ぐ向いた赤い髪が跳ねる。

四方を白っぽい煉瓦に囲まれた室内が一気に鮮やかさを増し、続けてこれまた華やかな銀髪の癖っ毛の束が二つ。色を添えた。

「ちよつ。このばかエリク！ ダットは病人なんだから、静かにしないとだめなのよ！」

赤と銀。

その二つは賑やかに僕の元へやってきた。

更にその後ろには金色が控えていて、彼女は苦笑すると「あまり騒がないようにね」と注意だけして去っていった。

「ごめん、母さん。この二人にそれは無理。」

「ダット。あたま打ってきおくそーしつとか聞いたけどヘイキか？」

母さんがいなくなつた途端、赤い髪のエリクス、通称エリクがベッドの上に乗り上げてきた。しかも自分で聞いておいて返事も聞かないうちに。

「お、ホータイまいてんの？ どこ打つたつて？」

更に質問を重ねてくるので落ち着かない。

それを咎めるのは銀の髪の少女。ライナの役目。

「ちよつとエリク。病人のベッドに登らないの！ ダットがゆつくり休めないでしょ」

エリクの襟首を掴むとそのまま引つ張り、床に引きずり落とす。

二人は同じくらいの体格なので、難なくそれは成功した。

「いでっ」

鈍い音と共に、エリクがお尻から床に落ちる。

一応マットを敷いてるけどその下は石だから、痛いだろうなあ。

「な、なにすんだよ。このぼーりよく女!」

お尻をさすりながらエリクがライナを睨みつける。

「あんたがダットのベッドに座るからでしょ。ダットは病人。ベッドの上で騒ぐなら帰んなさい」

ぎろり、とライナもまた目を細くする。

いつも通りの展開。

僕は、僕を放り出して睨み合いを始めてしまった二人を見てこっそりため息を吐く。

どうしてかこの二人、非常に仲が悪い。

顔を合わせると何かにつけて言い合いになる言うなれば、犬猿の仲。

だったら一緒にいなければいいのだけれど、気がついたら一緒にいる。

そしてひたすらこれの繰り返し。

「別にいいーだろ。それぐらい」

「よくない! あんたってばいつもそうやってダットを振り回してるじゃない」

「あー? おまえだってそーだろー。ダットがおとなしいからってあねき風吹かせてさあ。だからダットがつよくなれねーんだよ!」

「はあ? なに言ってるのよ。ダットはエリクみたいにガキ大将じゃないの。あんたみたいにになれるわけないでしょ」

「だからって女に守られるのがふつーじゃねえだろつ。だーから、オレがきたえてやろうつしてしてるんじゃない」

「あんたの鍛えるは危ないのばつかでしょ。ダットにケガさせる気!?!」

「ケガぐらいどーだっていいっての。父ちゃんが子どものうちはそれが男の勲章だって言ってたぞ」

「それはあんたの家の場合でしょ。ダットはねえ、あんたみたいに

「丈夫じゃないんだから！」

「僕が口を挟む間もない。」

「っていうか、どんどんヒートアップしていつているような気がするから、丈夫になるためにいつもさそってやってんだ。男がひよるひよるじゃカッコつかねーだろ」

「あのね。男がみんなあんたみたいないない人間なわけじゃない。ダツトはキーラおばさんに似て細いの。センサイなんだって、うちのお母さんが言ってたわ。だから」

「は？ だからなんなわけ。おまえこそ女のくせにいつも人をボコボコなぐりやがって」

「なっ。それはあんたがいつつも失礼なこと言うからでしょ！」

「バカ言うなっ。ホントのこと言ってるだけだろーが！」

「終わりそうないな。この口喧嘩。」

「根っこのところ原因が僕なだけに、僕が止めるのが筋なんだろうけど。下手に割り込むのもキケンな気がするんだよね。だからって放置しておくのもその後が怖いんだけど。」

「ほら、だってもう二人とも握り拳作ってるし。」

「今にもお互い飛びかかりそうな雰囲気……」

「それが失礼だっって言ってるのよ！」

「思った側からライナの腕が飛び跳ねた。」

「あ、ヤバイ。実力行使」

「が、救いの主はいるものである。」

「ノックもなしに部屋の扉が勢いよく開き。」

「ライナちゃん！ エイリクスくん！」

「エリクの脳天にライナの拳が打ち付けられるはずだった所に、鋭く切り込んできたのはウチのお母さま。」

「思わずエリクもライナもそして僕も、開け放たれた扉の向こう側を凝視した。」

その目を見て、僕の脳裏を過ぎったのは【鬼】という言葉。

あー、なんかヤバイ。目が据わってる。

いつもにここにこしてるか、泣きそうにしてるかどっちかの印象が強いけど、実は一家最強の看板を背負うのはこの人だ。

力自慢で敵つい顔の父でさえ、簡単に尻に敷いてしまつう。

今の彼女の顔は、父を尻に敷く時に見せるものに近い。

そう。先日の方のような、である。

「……あ。キーラ、おば、さん？」

ライナが腕を振り上げたまま固まり、エリクもなんだか扉の方向を振り向いたまま静止。

多分だけど、普段と違う母さんに驚いているんだと思う。

「ふふふ。ライナちゃん。エリクスくん」

「ここ、と母さんが笑う。

ただし目は笑ってないけど。

ここにエフェクトなんてものがあつたら、きっと母さんの背後からは黒い何かが出ていたに違いない。

それぐらいに怖い。怖すぎる。

母さんの視線が向けられていない息子の僕から見ても迫力ありすぎだった。

「わたし、さっきなんて言ったかしら？」

びくつ、と二人の肩が震える。

「ダットは今、ケガをしていて安静にしていなくちゃだめなのよ？だから……」

母さんが一歩、部屋の中に踏み入った瞬間だった。

みしり。

僕は確かに床板が軋む音を聞いた。

それはまるで死刑宣告の前触れのように。

「「「「……ごめんなさいいっつっつ……!」」」」

……そうなるよな。

正義（？）の女神さまに少年少女は平伏するのですた。

あらためまして幼馴染み

嵐が去った。

いや、まだ幾分は残っているけど、少なくとも直前よりはずっとマシな状態だと思う。

最初に来た時よりも幾分縮んだのではないかと思える赤と銀の二人は、母さんが用意したイスに大人しく座っていた。

居心地が悪そうに見えるのは多分母さんのせいだ。

母さんが部屋を出て行ってから、ずっと落ち着かない様子でちらちらと扉の方向を横目で見ている。また騒いだら即、あの状態の母さんが出てくるとでも思っているんだろう。

「え、と。二人とも？」

だんまりが続いたので、僕の方から話しかけると。

「お、おうっ」

「な、なにっ？」

おっかなびつくりで返事をされた。

……トラウマになってなきやいいけど。

そんなことを考えつつ、僕は改めて二人に話しかける。

「そんなに怯えなくても、普通に話をするだけなら母さんも怒らないよっ」

「けど、な」

やはり気になるようで、エリクがまた扉に視線を送る。

「どうしたの？ いつもならこう、だからなんだ。って顔なのに」

「ばっ。おまえ。おばさん相当怒ってじゃん。父ちゃんにしばらくれるよかこえーよ」

「そうよっ。キーラおばさんがあんなに怖いなんてはじめてだわっ」
エリクが焦った表情で、ライナもまたそれに準じた様子で声を出

す。

「うーん。確かにそうだけど、静かにしてれば平気じゃないかな」
さっきのは完全に行きすぎていたと判断されたために起きたことだから、普通にしていればあとは何も言われなはず。

なんだけど。

「ごめんね、ダット。このバカのせいで騒いだりしたから」

「ああ？ 誰がバカだった？」

何かとかみ合わない二人が一緒にいる以上それは無理かもしれない。
い。

エリクの目が鋭くなり、それに合わせてライナの目もまた細くなる。既に二人の瞳には剣呑さが見え隠れしており、一触即発の状態と言えた。

まったく。せつかく消えた火をまた付けるなんて。

流石にもう一度あれをやると今度こそ母は【鬼】と化し、実力行使に出るだろう。

そうなったとき、果たしてこの二人が再起できるかどうか疑問だ。

「あー、もうっ。そこまで！」

呆れと諦めの感情を絡めたため息が、言葉と同時に飛び出していく。

「エリクもライナも、僕そっちのけで喧嘩しない。そもそもの目的からズレすぎだろ」

二人が目を丸くして僕を見た。

多分いつもだったららしい言動に驚いているんだろうけど、まずは喧嘩の再発は防ぐのが優先事項だ。

「ここには僕しかいないからいいけど、もし病院とかだったらさっきの追い出されてるよ。もう少し時と場合を考えて行動できない？」

そもそもなんでそんな仲が悪いのに一緒にお見舞いにくるのか、そこがわからない。

母さんじゃないけど、呆れたくもなるというものだ。

喧嘩をするために僕の来たのではないと信じたいが……

そんな二人を交互に睨むように見れば。

「ダット……？」

「おまえ？」

共に奇妙なモノを見たと言わんばかりの顔で硬直していた。

うん。まあそうだろうね。

以前の【ダット（僕）】はこんな時オロオロと二人を見るのが精一杯で、二人が自然と喧嘩をやめるまでドキドキしながら待っているのが常だった。

人見知りも激しくて、人の顔を見るのも苦手で。

そんな内向的な性格の代表みたいな人間が、いきなり喧嘩に割って入って説教までし始めれば驚くのも当然だ。

「どうしよう。ダットが変」

どこか青ざめたライナの独白が耳に届く。

「ちよつと、まさかエリクのせい？」

頭を抱えるライナに、エリクが「じょうだんじゃない」と応じた。

二人は顔を付き合わせて小声で口論し始める。

「なんでまたオレのせいになんだよ。おまえのせいじゃねーの？」

「ちよ、バカ言わないでよ。そんなわけないじゃない」

「じゃ、頭打つたせいだろ。きおくそーしつらしいし。それでおかしくなったんじゃね？」

ちらりと僕の方に寄せられる視線が二つ。

色々と勝手に想像しているだろうことが、その様子からも見て取れる。

「でも、だからっておかしいわよ。ダットよ。あのダットがよ。あんなしゃべり方するなんて絶対に変」

「あー、まあそうかもだけどよ。前に父ちゃんがきおくそーしつでせーかく変わったりすることもあって言ってたぞ」

「でも変でしょ。あんな別人みたいなしゃべり方っ。どう考えたってダットじゃないわ」

君たち。全部聞えてるんですが？

「二人とも」

声をかけたらびくつ、と二人が肩を震わせた。ゆっくりと二つの顔が同時に僕の方を向く。

何か見てはいけないものを見てしまったという雰囲気、僕は再びため息をついた。

「言いたい放題してるけど、僕の話聞く気ある？」

「え」

「あ」

なんとも間抜けな顔で固まる二人。

「簡単に、だけど説明するよ。僕の性格がどうして変わったのか知りたいんでしょ」

この二人相手ならまどろっこしく考えるよりもはっきり喋った方が伝わりやすい。

ただ、やはり前世うんぬんは伏せるのは決定だ。

完全におかしい人に見られるだろうし、説明してもうまく伝わるかわからない。

父さんや母さんに話せたのは、ごまかすのは難しいっていうのももちろんあつただけど、一番の理由は彼らが大人で両親だったから。

でも今目の前にいるのは【ダット】よりも一つ、二つ年上なだけの少年少女なわけで、彼らに両親にしたのと同じ説明をしたところで理解されるかどうか……

ひとまずは彼らが納得できるような言い訳があれば、それで大丈夫だろう。

僕の提案を受けたエリクとライナが顔を見合わせるときこちなく頷いた。

それを確認すると僕は当たり前障りのないように言葉を選んで形にする。

「僕の性格が変わった理由はエリクが言ってた通り、かな」

「それって、きおくそーしつになったからってことか？」

「多分ね。でも、記憶喪失はもうよくなつたし、記憶の混乱もないよ。ただ、記憶喪失だったときの性格がそのまま残っちゃったみたいなんだ」

「……そんなこと、あるの？」

ライナが真つ直ぐ疑惑の眼を僕に向ける。

彼女は頭がいいから、下手な言い訳では説得できない。けれど、強引に押し通すことが出来れば多少の疑問は残ってもなんとかなるはず。

「僕にもそのあたりのことはよくわからない。気がついたらこうだったしね。それ以外に説明のしようがないんだ。僕だってまさかこんなことになるとは思わなかったし」

そもそも生まれ変わりなんてものが実際に起ころうとは予想外だし、予定外だ。

しかも異世界なんていう全く別の次元に来てしまうなんて、僕にも理解不能な出来事ではない。

だから何かを見極めようという表情のライナの視線は非常に困る。

「あやしい」

「おま……ライナ。ダットがそう言ってんだからそうなんだろ。別にーじゃん」

一方のエリクはそんなライナを面倒くさそうに見て肩を落とす。

「ダットはダットだろ」

「そうかもしれないけど」

納得いかない顔で、僕を見たライナは「もういい」とそっぽを向いた。

その後は僕を窺うように見ている目を逸らし、会話にもあまり加わらず。おかげで追い出されるような騒ぎはなかったのだけけど。

面倒なことになりそうな予感に、僕はこっそりため息をついた。

魔法の道は一日にしてならず！

実のところ、この世界での文字普及率はあまり高くない。らしい。小さな村では村長以外誰も文字の読み書きが出来ないなんてことも珍しくないし、下手をすると誰も文字を知らないという日本では考えられないような村もあるみたいだ。

とはいえ、村や町の規模が大きくなればそうも言っていられない。大きな町では文字看板もあるし、無償で文字を教えて貰える場所もいくつかは存在していて、必要ならそこで学び、それ以上のことを学びたいなら国や領主が運営する学校へ行くというのが主流のこと。それには一般庶民が目の飛び出るような金銭が関わってくるから、余程のことがない限り日常生活を送れる程度の文字や簡単な計算を学んで終わり、という感じらしいけど。

ただ、やはりそれは地域事情によって若干異なるようで。カーライルはこの近隣を治める領主の方針もあって、識字率が他の町より高い。

領主が独自に無償の学校を開設していて、誰でも自由に文字や学問を学べるようにしているからだ。

理由は色々とおあるようだけれど、一番の理由は魔法。カーライルの西方には未だ人間が踏み入り難い魔物の領域が存在していて、町の外壁を一步出ればそこはもう危険地帯。町の周辺にはそれほど危険な魔物の縄張りはないが、西方にある山脈に近づけば近づくほど危険度は増していく。一応は境界線として砦が設けられているが、あくまでも境界線だ。完全に魔物の侵入を防げるわけでもなく、それを軽く飛び越えてやってくる魔物もいる為、油断は出来ない。

しかも、武具のみで倒せる魔物だけではないので魔法の需要は高かったりするのだけれど、実際に魔法を使える人材はそう多くない。国によって差はあるが、ジードリクス王国での魔法使いの割合は三人に一人程度。十分に補える人数に見えるが、それを戦場に立てるくらいまで昇華できる人間はほんの一握りしかない。

だからこそ、早期にそういった人材を確保できるようにカーライルでは十歳になる子どもに対して魔法使いの素養があるか判定を行い、適正があれば魔法使いとしての指導を行うことにしているらしい。

ちなみに、僕に貸し出された【魔法基礎読本】はこの備品で、用が済めば返却することになっている。

まあ、【魔法基礎読本】だけではなくて他の教科書類もそうなんだけど。

経費節減というか、リサイクルというか、紙の供給量があまり多くないのも要因か。

現在学校に通う生徒数は二百人弱。完全に自由登校なので日によって人数は異なる。

年齢層は大抵が五歳から十四歳だったが、それ以外でも五十代の孫がいるという人間が字を覚えたいと通っていたり、魔法の基本を抑えたいという旅人が来たりする。

教室もそれぞれ大体の年齢層別になっていて、覚えたい事柄のみを選択して勉強することも可能なので大人から子どもまで様々な年齢の人間が同じ教室に座ることもあった。

【基礎魔法学】の授業はまさにその代表格と言えるかもしれない。学業復帰初日。

学校の敷地内に設けられた訓練場。まるで体育館のような広さの場所に【魔法基礎読本】を手にした子どもと大人、四十人程度が集まっている。

当然その中に僕も含まれているわけだけど。

その中心にいるのは本を持たない三人の大人たちで、それぞれが

【魔導具】を手にした魔法使い兼教師。

「はい。じゃあ、今日の授業を始めるわよ」

最初の声かけをしたのは金髪碧眼の女性だった。緑色のワンピースの上にシヨールを羽織った姿がとても絵になっていて、明るく、人懐っこい性格なので、大人から子どもまで人気がある教師だった。「まずは魔素を集める訓練ね。それから組み分けして、それぞれに合った練習をするから。わたしとフェイル先生。サイラ先生に見てもらって合格が出るまで待機してください」

並んで、という指示に従って生徒が三列にまっすぐ並ぶ。一列ずつ一人の教師が見るためだ。

子どもは素直だから素早い。あっという間に並んでしまう。

僕も遅れない程度にそれに習った。

一方、そんな子どもたちの中に混ざるほかない数人の大人たちの行動はゆっくりだった。しかも体格が違うからそれが目立つ。更に魔法を学びたいのは山々だが、子どもの中に混ざるのはちょっと。という顔を隠さないのも子どもに敬遠される。そしてまた目立つ。悪目立ちしてる感じが。

まあ、そんな大人ばかりじゃないわけだけ。

並ぶのが遅れた大人は一番後ろに回るので時間がかかったが、順番的には前からだし、教師陣はその辺り慣れているので問題ない。

「魔素を集める段階では【魔導具】を意識する必要はないわ。ただ、息をしつかり吸って吐く。自分の周囲にある空気を意識して。目に見えないからわかり辛いけれど、ちゃんと感じられるはずよ。それを自分の中へ引き込むよう想像するの」

初心者向けの説明をしながら、教師たちは前から後ろへ一人一人の状態を見ていく。

慣れない人間には無理だが、長年魔法に携わってきた彼らのような教師だと見ただけで魔素や魔力の流れが見えるらしい。

ただ、それにも才能が必要らしいけど。

「ラウチさんは、もう少し肩の力を抜いてみて。今の状態は取り込

むじゃなくて弾くになっちゃってるから。アーヴィルくんはちょっと慌てすぎかな。もう少しゆっくりと。それだと魔法を使うときに失敗しやすくなるよ。自分をちゃんと制御できなきゃ駄目。スーリくんは……うん。流石だね。前よりずっとよくなってる。この調子で頑張ってる」

的確にそれぞれの注意点を見い出して、指摘していく。

後ろの方に陣取った僕まではまだかかりそうだったが、僕がこの授業で実技を受けるのは今日が初めて。

頭を打って休んでいた間に何度か本を読み返したものの、実践はまだだった。

ほとんどベッドから動かないまま数日を過ごしたわけだから、ちよつとはそういうのをしてもよかつたんだろうけど。

ていうか、試したけどさ。

魔素を集めて魔力に変換するのが全くわからなかつたんですね。

これが。

誰かに聞こうにもうちの両親は魔法使えないし。

こんな感じで魔法を使えるようになるんだろうか。ってホントに思つたし。

胸にさげた【魔導具】を見下ろすとついついため息が出てしまう。でも、ここで悩んでいても仕方ない。

「はい、次」

顔を上げると金髪碧眼の教師の姿がそこにあった。

おっと。もう順番が来たのか。

思ったよりも早く順番が回ってきたらしく僕は慌ててしまったが、彼女の方はそんな僕を笑顔で見下ろす。

それは母の笑みによく似ていて。

「ダット。待ってたわよ」

「シェリナ叔母さん」

実際、母さんの妹なわけなんだけも。

母さんよりも五つ年下だという彼女はまだ二十三歳と若い。十五

歳の時から別の国の魔法学校に留学、三年前に帰ってきた実力者で、現在は自警団とここの学校の教師を掛け持ちしている。

「元気そうね」

右手の人差し指に指輪型の【魔導具】をはめた彼女は視線を僕の位置に合わせると頭をそつと撫でてきた。

「頭を打ったって聞いてちよつと心配していたんだけど」

「あ、うん。心配かけてごめんなさい」

「あら、いいのよ。わたしこそお見舞いにいけなかつたんだもの。謝らなきゃ」

「そんなことは……」

なんて授業とは関係ないことを話していたら近くを通った黒髪の男性教師、フェイル先生に睨まれた。

「シエリナ先生。授業中です」

物凄く生真面目で有名な教師で、しかも神経質。眼鏡かけたら絶対に似合うタイプだけど、生憎とこの先生は裸眼。受け持ちの授業がないときは領主館で秘書的なことをしているらしい。

うん。やっぱり眼鏡があつたら完璧だと思う。

でも、怒らせると面倒なことになりそうな感じ。

その辺りは叔母さんもわかつているのかすぐさま謝罪。

「あ、そうですね。ごめんない」

「公私混同は困ります。そういうったことは授業の合間にしてください」

うわあ。超真面目だし。

フェイル先生はこれ見よがしに嘆息して、自分が受け持つ生徒たちに向き直った。

正直、付き合いにくい先生でもある。

僕と叔母さんの間に気まずい沈黙が降りたが、それはそれ。

「え、と。じゃあダットくん。この訓練は今日が初めてよね。わからないことは多いと思うけどその辺りのことはちゃんと教えるから聞きたいことがあつたら言っつてね」

叔母さんも教師として生徒に教える身だ。切り替えは早かった。僕はそれに頷いて、説明を聞いていく。

「この訓練場には、通常の状態よりも魔素が集まりやすいように【紋章】を敷いているの。だから魔素を感じ取ることが苦手な子でも、比較的簡単に魔素を魔力に変換できるようになっているわ。ここまではない？」

「はい」

「魔素は目では見えないものものよ。魔力もそう。でもそれを感じ取ることは出来るの。魔法を使う人間はみんなの能力を持っているわ。普段は無意識にだけけど、魔素を魔力に換えているの。でも魔法を使うにはそれを意識的にしなくてはいけない。だからまず、あなたにはそれを感じてもらおうね。わたしが見本を見せるから、よく見ていて」

叔母さんはそう言うのと僕から少し離れた場所に立った。

他の生徒も気になるのか、僕と同じように叔母さんを見つめている。

「はい。これが通常の状態。魔素を取り込む前ね。そして……」

叔母さんはリラックスした表情で肩の力を抜くと両手を胸の位置に当てて息を吸い込む。

一瞬、空気が震えたのはわかったが。

「これが魔素を取り込んだ状態ね。この時点で魔素は魔力に変換されるわ」

さつきと何ら変わらない状態で言われて、僕は目を瞬かせた。

「ごめんなさい。さっぱりわかりませんでした。」

それが顔に出ていたらしい。

僕の表情に気がついた叔母さんが唸る。

「もっとわかりやすくするなら、魔法を使った方がいいかしら」

そう言うと少し考えた様子で「これはもう少し後になると思うのだけれど」と右手にはめた【魔導具】を示した。

「いい？ 一度しかやらないわよ」

そう言つと叔母さんは右手を前に差し出した。

【汚れしは堕ちし我が身。歪みしは我が心。我望む。我願う。浄化の風を吹かせたまえ】

今度はわかった。

叔母さんが呪文を口にする度に空気が震え、叔母さんの方へ引つ張られる。そして呪文が終わつた瞬間、叔母さんを中心にして風が起こつた。

暴風とは言わないが、思わず構えずにはいられない程度の勢いで。

「わっ!?!」

「きゃっ!」

何人かの生徒が驚いたように悲鳴を上げる。

ちよつと魔法が大きすぎたらしい。バランスを崩して倒れかけた生徒もいるようだ。

うん。僕から見てもこれはやりすぎだと思う。

叔母さんも予想外だったみたいでちよつと慌ててるし。

そして。

「シエリナ先生!」

またもや声を挙げたのはフェイル先生だった。額に青筋が立っているように見えるのは多分気のせいじゃない。風が収まるや否や、ずかずかと叔母さんに近づきひとこと。

「やりすぎです!」

「うっ。でも、これが一番初心者の子にはわかりやす」

「だとしても、こちらにもひとことあっていいはずです。生徒にケガでもさせたらどうするんですか!」

完全に怒っている。

縮こまって言い訳する叔母さんが最後まで言い終わらないうちに彼女を叱り飛ばした。

「大体あなたはいつも大雑把すぎるんです。あなたの魔法に対する

知覚が優れていることは認めますが、だからと言って感覚だけで魔法を使うことが危険だというのは常識でしょう。それを生徒にきちんと教えるのも私たちの仕事なんですよ！」

「あ、う。は、はい。ごめんなさい」

青筋を立てて怒りを露わにするフェイル先生に、叔母さんがちょっと涙目になって萎れた。

まあ、確かに叔母さん今のはちょっと不味かったかも。

フェイル先生が言うことも一理ある。

学校で教師をするということは、よそさまの子どもを預かるということに他ならない。

子ども同士の喧嘩ならともかく、授業中にケガをさせたとあつては教師としての面目が立たないし、責任問題にもなりうるのだ。

フェイル先生はそれを指摘したに過ぎない。

一応僕も【橋本誠也】だった頃は教師を目指してた身だし、それぐらいはわかる。

フェイル先生はしばらく叔母さんを睨んだ後、彼女の処遇について通告した。

「もう結構です。止められなかったこちらにも落ち度はありますから。ただ、この件はしっかりと学長に報告させていただきます」

「えっ!？」

「せいぜい叱られて反省してください。あ、減給は免れないでしょうね。きつと書類もいろいろと書かされるとは思いますが、自業自得です」

「ちょ、フェイル先生っ!」

「クビになりたいですか?」

それを言われれば、もう黙るしかないだろうなあ。

叔母さんは涙目をぐっと堪えて「わかりました」と頂垂れた。

「では、授業を再開しましょう」

叔母さんを叱ったことですっきりしたのか、フェイル先生の表情はいつもの真面目なものに戻っていた。

が。

「あ、それと」

言い忘れたと言わんばかりに叔母さんを見てこう言った。

「これから先、ダットくんは私が見ます。あなたに任せていたらとんでもないことになりそうですから」

これには叔母さん完全に撃沈。

僕に教えられるって判定が出たときに物凄く喜んでたから、これは何よりの罰だろう。

抗議しようにもフェイル先生の方が先輩になるので、立場的には叔母さんの方が弱い。

「というわけで、ダットくん。よろしくお願いします」

生真面目なこの顔は絶対に今言ったことを実行するに違いない。

多分僕が叔母さんがいいと言っても無駄だ。

「え、と。じゃあ。お願いします」

「ごめん。叔母さん。僕じゃ逆らうの無理。

追い打ちをかけられて膝をつく叔母さんに、周囲の生徒が「哀れだ」と呟いていたのは聞かなかったことにした。

歴史の勉強、感想文

「で、どうだったわけ？ 初めての魔法」

一般の授業を受けるための教室で絡んできたのはエリクだった。エリクは魔法の素養がないため、午前中いっぱい取られていた【基礎魔法学】の授業は受けていない。本人は別にそれを気にしてはいないようだったが、興味だけはあるらしい。

「どう……って。別に。午前中いっぱいずっと魔素を集める練習してただけだよ」

叔母さんの魔法によって一時は大変だったが、その後は普通に授業は進められた。と言っても実技なので最終的には初心者、中級者、上級者と分かれてそれぞれ出来ることをしたただけだ。

僕はフェイル先生の指導を受けて、叔母さんの魔法で感じ取れた魔素が引き寄せられるあの感覚を再現するため、初心者ゾーンで四苦八苦しただけで授業が終わったけど。

フェイル先生に言わせれば「最初の最初はそんなもの」で、あとは繰り返し練習あるのみとのこと。

何度も繰り返し返すうちに覚えるそうなので、気長にやりなさいと言われた。

「ふーん。魔法って面倒だな」

昼食に持ってきた弁当を机の上に出すと、エリクが横に陣取った。「そりゃね。しっかり制御しないと暴走して危ないわけだし。簡単にはいかないよ」

そう答えた僕の脳裏に浮かんだのは自動車だった。

あれもすっかり前を見据えて運転しなければ事故に繋がる代物だ。だからこそルールあり、免許が必要だった。

それと同じで魔法はそう簡単に得られるようなものじゃない。

僕はこの最初の実技授業でそれを実感させられた。

「ま、そりゃどーでもいーんだけどさ」

じゃあ聞くな。と言いたくなるような台詞を吐いたエリクが背後を振り返る。

「あいつ。どーすんの？」

「いや、どうするって聞かれても」

エリクのように振り向かずともわかる、とある視線。

朝からずっと感じるそれに僕は肩をすくめた。

「ライナのヤツ。わかりやすすぎだつての」

そう。視線の主はエリクの言う通りの人物のものだ。ほんの少し視界を動かして、その端から見えたのは昼食らしいパンを銜えた銀髪少女の姿。しかも睨むようにこちらを窺っている。

「朝、おはようって声かけたら逃げられるし。そのくせこっちを窺ってるし。凄くわかりやすいんだけど、ちょっとやりづらいね」

「ま、そんだけセーカク変わってりゃな。こないだ見舞い行った日の帰りがけ、あいつおまえの正体暴いてやるって叫んでたぞ」

「あー、どうも納得してないっぽいな。とは思ってたんだけど。やっぱりそうなるんだ」

実は【基礎魔法学】の間も彼女の視線は感じていた。

ライナも僕と同じで魔法を使う素養を持っていて、彼女の方がそれに關しては一年先輩だ。

僕が前世の記憶を取り戻す前までは「あたしがちゃんと教えてあげるから大丈夫よ！」と息巻いていたのだが……

「すっかり警戒されちゃったなあ」

「そのうち飽きるんじゃない？」

エリクは気楽にそう言うとうちの弁当を食べ始めた。

だといいけど。

ジャガイモに似た芋を蒸かしただけの味気ない代物にフォークを突き刺し、僕はその問題をひとまず忘れることにした。

午後の授業はジードリクスに関わる【歴史】の話で始まった。

ジードリクス王国は元々すぐ北に位置するラグドリアという帝国の領土で、かつては魔物が横行する未踏の地だったそうだ。

それを人が住めるように開拓した人間こそ、ジードリクスの初代女王ルリア・ジードリクス。

【救世の聖女】とも呼ばれる人物だった。

そしてその女王をその横で助けた人物がダードリー・ウィットとカイ・シド。

二人もまた【双黒の比翼】という二つ名を得ている。それが約二百年前のこと。

ジードリクス王国を愛する人間であれば、誰でも知っている英雄物語である。

教壇に立つ年配の茶髪の女性　カリイナ先生と言う　がよく通る声で三十人ほど集まった子どもたちに語りかける。

「北の帝国ラグドリア。彼ら三人は元々帝国の民でした。今でこそかの国は平定を取り戻し、民も穏やかに暮らしていますが、その当時は権力者が弱い者を虐げることが当たり前の状態だったようですね。ルリア・ジードリクス。後の建国の女王は元々帝国貴族の娘でした。彼女が残した手記にはその当時のことが鮮明に記されています。あえてここでは語りませんが、教科書には載っているのです、興味がある人はそちらを読んでくださいね」

カリイナ先生はそう言うて途中の内容をスルーした。それも仕方ないというかなんというか。

僕は手元の教科書の抜粋されたその部分を読んで苦笑いを浮かべた。

「平民は奴隷として売買され、粗相をすれば斬り捨てられる。ある夜会では老若男女が地下で賭けをしていた。奴隷同士を闘わせ、殺

し合わせるのだ。親子、兄弟、姉妹。負けた方に訪れるのは死。そこから逃れるために相手を殺す。時には自ら命を絶つ者もいた。帝国の都は煌びやかだったが、その裏では魔物よりも非情な世界が広がっていた』

この教室にいるのは大体が九歳から十一歳までの中間層。

低年齢層の子どもにはちよつと刺激が強い内容だ。

読まずに済ませる気持ちもわかる。

もう少し年上　十二歳から十四歳程度　になると踏み込んだ

授業もするらしいが。

日本だつたら絶対にあり得ない内容だが、この辺は異世界だからなのか、それとも文化の違いだからなのか。

そのあたりのことは置いておいて、有名な建国の女王とその仲間についての説明は続く。

「彼女は、十五歳になると行動を起こしました。帝国を変えるために動き出したのです。けれど周囲の賛同は得られず、窮地に陥ります。反逆の罪を被せられ投獄されたのです。そこで出会ったのがダードリー・ウィットでした。彼もまた現状に意義を唱えた帝国貴族の子息。二人は絞首刑になるはずでしたが、幸運なことに義賊によって助けられます。名はカイ・シド。これが英雄三人の邂逅でした」
ここから先三人は様々な苦難に遭遇し、立ち向かっていくことになる。

脱出先で出会った奴隷扱いの者たちを救出して帝国南部の同じ志を持つ貴族の元へ逃がしたり、助けられずに処刑される場面に出会ったり、悔いている彼らと師匠となる魔法使いと出会ったり、人間の言葉を理解する魔物に遭遇したり。

様々な偶然と巡り合わせと彼らの行動力の結果がジードリクス王国という国を作り上げた。

「元々魔物の領域であったこの地の開拓は、決して容易ではなかったといえます。戦える人間も少なく、死者もまた多く出たそうですが、彼らは諦めずに少しずつ人が生きていける環境を整えていきま

した。そして同じ頃、帝国内でも変化が起こります。帝国の現状に不満を持った地方貴族達が連携して動き始めたのです。その先頭に立った人物が後の新生ラグドリア帝国皇帝ルジュア・ルール・ラグドリアでした」

実はこのルジュアという皇帝、元々帝国の第三皇子でルリア・ジードリクスとは友人で幼馴染みだったらしい。

思想もよく似ていてそのせいで彼は地方に左遷。ルリアたちが追われた後、密かにその跡を追って支援などをしていたそうだ。

ルリアたちの元には続々と奴隷扱いをされていた人間が集まっていた。中には脱走兵などもいたらしい。更には魔物と闘うということもあり、傭兵なども雇うこととなり、気がつけば帝国の一個師団にも負けないくらいの戦力が出来上がっていた。

そうして。

「ルジュア皇帝とルリア女王は同時に立ち上がりました。女王は帝国からの独立を宣言。帝国はそれを認めず、最大戦力で軍を送りました。この間、帝都の守りは手薄になります。ルジュア皇帝はその隙を持って帝都を占領しました。この知らせを受けた軍はすぐに取って引き返しますが、元々民にはよく思われていなかった彼らはこれによって瓦解。敗走することになったのです」

やがて、帝国内での肅正が終わりを見せる頃。

ルジュア皇帝は改めてルリア女王に独立を認めることの声明を発表。

よき隣国であろうことを約定にて制定した。

別に帝国がちゃんと皇帝によって肅正されたんだから独立しなくてもいいんじゃない？　とも思うところでもあるが、それは奴隷として扱われてきた人々の心身上のこともあり独立という方向で決着したそうだ。

と、大体おおまかな国の成り立ちはこんなものだろうか。

実際はもっといろんな意図が絡まっていたんだろうけど、過去のことは過去の人間にしかわからない。

未来にいる人間としては、残された証拠からそれを想像するしかないわけだしね。

「というわけで」

カリイナ先生はにこにここと笑みを浮かべながら指を一本立てた。

「この話はみなさんもよく知っていることと思いますが、今日の課題はこの建国にまつわることについて感想文を書くこととします」

え……？

僕は思わず、手元にある見た目黒板ミニチュアサイズのそれを目を落とした。紙の供給量が少ないこの国でのノート代わりになるもので、対になった木の棒で文字を書く仕様になっている。

少量の【魔鉱石】と両方に特殊な細工の【紋章】が刻まれていて、【紋章】同士を触れ合わせることで文字が消える。という仕掛けの【魔道具】で便利なのだけど、所詮は黒板。感想文を書くほどのスペースはない……んですけど。

同じ教室にいる四十人弱の子どもたちも普段なら絶対にする事のないことを言われて戸惑っている様子だった。

そんな僕たちの反応をカリイナ先生は微笑むことで制すと、一体いつこの教室に持ち込んだのやら。普段用いることのないはずの紙の用紙を教卓の上に持ち出す。

そして次には。

「紙も書く道具も揃えていますから、安心してください」

でん、とペンやらインクやらが入っているらしい箱を取り出した。

……いや、だからそれ何処から出てきたの？

確か授業が始まる前にはそこには何もなかったはずなんです。というか、カリイナ先生教室に入ってきたとき、教科書以外のものは持ってなくなかったです。僕の見間違い……？

いろいろ突っ込みたいのは山々だったが、カリイナ先生は続きを話す。

「実は学長が、皆さんの日頃の成果を見たいということでごまぐれに提案をしてくれやがりました。普段は触れることのないものに触

れてみるのも一興だとこのようなことと相成りました」

ふう、と息を吐くカリイナ先生。その表情がどこか疲れて見えるのは見間違いないだろう。一部棘付き発言も含まれていた。

ていうか今、野郎言葉入ってましたよね。

いつも落ち着いた雰囲気を崩さない穏やかな彼女の意外な一面を垣間見てしまった僕を含めた生徒たちは、それぞれ隣の席同士で顔を見合わせた。

そんな微妙な空気が流れる中、前の方の席に座っていた生徒が手を挙げて発言する。

「せんせー。それって試験ってことですか？」

それは年に一度紙を使ったテストが行われるためのことだったが、前回のテストは半年前にあったばかりだからそれはないはず。

予想通りというかなんというか。

「いいえ。今回のこれは違います。あくまでも学長の提案で行われる突発的事故、とでも思ってください」

カリイナ先生は首を振って否定した。

やっぱりなんだか、発言内容がおかしいけど。

学長となにかあったんだろうか。ここの学長はちょっと変わってることでも有名だし、その関連……かも。

「まあ、それは横に置いておくとして。課題の件です」

気を取り直したカリイナ先生は閉じた教科書を持ち上げる。

「教科書に載っていることだけを題材にしてもよいですし、もう少し詳しいところを書きたければ書庫へ行って調べてもらっても構いません。建国に関わることならなんでも結構です。ただし、提出は今日中にお願いますね」

つまり、この後はほぼ自習状態となるわけで。

「わからない字などがあれば質問に応じますよ」

という言葉最後にその場がわっとうるさくなった。

友だち同士でどうするか相談を始めたのだ。が、残念なことに僕の側にはそれを相談する相手がない。

エリクは年齢が二つ上なので十二歳から十四歳までの上級生の教室に回されているし、同じ教室にいるライナは僕の事を警戒して近づいてこない。

その他の子どもたちも、僕との接点がありませんいたため相談相手になりようがなかった。

さて。ではどうするか。

少し考えてみたものの、決断は早かった。

歴史の勉強、感想文（後書き）

補足。

【魔導具】 魔法使いのみが扱える道具。魔法補助器具。魔法を制御し導くため道具。

【魔道具】 魔法使い以外でも扱える魔鉱石を使用した道具。日常生活等で使用。

書庫にて

カリイナ先生の許可をもらい、ミニチュア黒板もどきを抱えて向かった先は学校内に作られた書庫の入り口。

重厚な扉を開けて入室したその瞬間にやってくるのは古い本独特のかび臭さ。それに合わせて貸し出しのカウンターに座っていた金髪の女性が僕の姿に気付いて声をかけてきた。

「ダット……？」

「こんにちは。シエリナ叔母さん」

午前中に会ったばかりの叔母が驚いたように立ち上がると、その肩口で切りそろえられた金髪が舞う。

彼女の表情が気まずそうなのは、僕がサボりでここに来たと思ったからか、それとも朝のことがあったからか。

「え、どうして？　なんで……」

「授業で感想文を書きなさいって言われたから。その資料探しに来たんだ。今日中に提出って言われたから。多分他にも何人かは来ると思うよ」

「感想文？」

僕が抱えたミニチュア黒板もどきを叔母さんが不思議そうに見下ろす。

「試験、じゃないわよね」

「うん。学長の指示だって。カリイナ先生が紙を用意したからそれに書いて提出しなさいって」

「え。学長の？」

「カリイナ先生は学長の気まぐれだとか、言ってたけど」

「あー、学長の気まぐれか」

叔母さんが苦笑いを浮かべた。

「でも、それにしてもね。いつもなら【全生徒対抗魔法のお宝探し】とか【異仕掛けの陣地取り合戦】とかそういうのを企画して持ってくるのに」

「あー、あつたね」

領主さまの友だちが開発したとかいう新作【魔道具】景品にしたり、学校中いろんな異仕掛けて、先生たちが丸一日片づけに奔走したり。

他にも突発的に【自警団に負けるな障害物捕り物競争】とか【難問百解いたらこれで君も天才に】などなど自警団を巻き込んだり、たいして意味のないクイズ大会を試してみたり。

しかもそれは魔物が町に襲撃をかけてくるのと同じぐらいの頻度でやってくる。

教師陣もノリの良い人間はいいのだが、後始末が毎度大変なのでどちらかというと不評だった。

カリイナ先生が奇妙な言動をしてしまったのも、多分その大変さからなんだろうなあ。と考えることにする。

まあ、今回のこれは単に感想文を書けというだけなわけだし、それならそうおかしなことにはならないはず。

叔母さんも言うだけ言ってみたもののたいして深い意味はないだろうと判断したようだ。

話題はすぐに課題の中身に戻る。

「それで感想文って、なんの感想文を書くの？」

「ジードリクス王国の成り立ちについて。それについてならなんでもいいって」

「あら。じゃあちょっと奥の方になるわね。でも、ダットくらいの子が読めるような本は少ないわよ」

「え、そうなの？」

「ええ。資料になりそうなものは難しく書いているものがほとんどだもの。子ども向けとなると……やっぱり簡単に装飾された話が多

いから」

そうは言いつつも、捜してくれる気はあるのか、叔母さんはカウンターから出てきてくれた。

自分の受け持ちの魔法系授業がないときは書庫が定位置の彼女だ。どこにどんな本があるかは把握しているはずだから、読みたい本を探すなら任せるに限る。

「それを覗くとやっぱ難しいかな。あまり子どもにはあまり見せたくないような描写が入ってるのも多いし」

「え、駄目？」

「駄目じゃないけど。感想文を書くだけならあの教科書だけでも出来ると思うわよ。おすすめはできないなあ」

となると、教室に逆戻りするのが正解ってことだろうか。

「もう少し上の子達たちなら読めそうなものもあるんだけど。ちょっと違う切り口で感想を書いてみたいって思うなら、わたしが選んで口頭で教えるのもありだけど。どうする？」

どうする、って言われても。

一応叔母さんも魔法系の授業の担当だけど教師なわけだし、それだと他の教師の授業に割り込む形になるのはないだろうか。

……ちよつと微妙だ。

「え、と。叔母さん。とりあえず、本があるところに案内して。本は僕が選ぶから、読んでほしくないような本だったら言ってくれる？ そうしたら別のにするから」

そう言ったら、叔母さんはちよつと驚いた様子で目を瞬かせた。

「あーあ。本当に姉さんの言ったとおりなのね」

誰に向かって言うでもなく、彼女は呟く。

「叔母さん？」

「姉さんから聞いたわよ。記憶喪失になったら一気に性格が大人になっちゃって困ってるって」

「えー！？」

「その通りね。態度が全然子どもらしくないし、しゃべり方も前と

違うし。利口すぎるわ。まるつきり別人ね」

……母さん。一体何を叔母さんに喋ったんだろう。

少し不安だったけれど、心配性な母さんに比べるとこの叔母さんは楽観的思考の持ち主で。

「まあでも、姉さんが大丈夫だって言ってたし。わたしだって魔物とそうじゃないものとの区別はつくわ。だから心配しなくても平気よ」

「え、あ。はい」

心配するまでもなく、叔母さんは自分の中でいろんな事に決着を付けたみたいだ。

けれど。

「ただ、油断はしないこと」

少し安心した顔の僕に、彼女は忠告を付け足した。

「いくら家族があなたをちゃんとあなただって認めても、赤の他人は簡単にはいかないわよ。明らかに、あなたの変化は異常だもの。気を付けなさいね」

「はい」

そこは言われずとも、と言いたいところだが素直に受け取る。

心配して言ってくれてるわけだし。

猫を被る、のは無理にしてもある程度隠すべき所は隠すつもりではある。

最初はそこまでする必要はないと思っていたんだけど、その辺りは今朝父さんに散々言い含められた。

「出来るだけ気を付けるつもりです」

にこりと笑ってそう返答すると。

「だったらその喋り方はしないほうが賢明ね」

もっと子どもらしくしなさい、と額を弾かれた。

軽くだけど、痛いよ叔母さん。

少しだけ恨みの念を込めて睨めば「ごめんごめん」と彼女は笑った。

「じゃ、時間がなくなるといけないからささっと捜しましょうか」
まだある程度余裕はあるけれど、感想文の提出は今日中だ。時間は限られている。

僕は歩き出した叔母さんの背中を追って、少し小走りになった。基本書庫は大声厳禁。それは異世界でも同じで、叔母さんと僕の足音が薄暗い書庫の中に響く。

明かりは小さな天窓から入る僅かな太陽の光と、かるうじて文字が読める程度に調整された光を発する【魔道具】のみ。

貴重な本を出来るだけ痛まないようにするための処置ではあるが、足下まではしっかり照らしてはくれない。しかも床は石畳。たまに出っ張りがあつたりするので注意して歩かなければいけなかった。

「あ、そうだ」

やや下向きの視線で追いかけていた叔母さんが横目で僕を振り返る。

暗がりの中でも見えるその目はちょっと悪戯っぽく輝いていて、僕はなんだか嫌な予感を覚えた。

実際その予感は外れてはいなくて。

「ライナちゃんと早く仲直りしなさいよ」

僕はため息を吐いた。

まあ、叔母さんも僕やエリクやライナのことをよく知っている人の一人だし。

今朝の【基礎魔法学】の授業で一緒にいなかったところも見ているのだから、何かあつたと思つて当然ではある。

「……失敗した？」

なんとなく予想はついてるぞ。と大人特有の余裕の笑みがちょっと気に入らないけど、その通りなので反論はしない。

「なんか変な疑惑持たれてる」

多分、父さんの時と同じような【魔物憑き】疑惑だろうけど。

「お見舞いに来たとき、ちょっと説明したんだけど納得できなかったみたいで」

「あー。急なダットの変化についていけなかったわけだ」
はい。的確なご指摘ありがとうございます。

「なるほどね。それであんな警戒した目をしてたんだ」

「ええ。まあ。朝からあんな感じで、すっごい視線感じてやりづら
いっただら」

しかもその様子を周囲にはつちり見られているのだ。

本当ならいつも一緒にいる【ダット（僕）】とライナが別々に、
しかも一方的に睨んで睨まれての光景は全員が奇異に思っただたり
前の光景だ。

それが好奇の目を生み、じろじろと朝からちよつと鬱陶しい視線
も混ざっていた。

前世の僕のモットーは平凡で平穩のはず……だったんだけど、ど
こでどうおかしくなったのか疑問だ。

叔母さんは楽しそうにそんな僕のしかめっ面を見下ろしている。

「ま、仕方ないわね。あの子はお姫様を守る凄腕戦士よ。今まで守
つてた相手がいきなり別人みたいになったんじゃ、すぐには信じら
れなくて無理もないわ」

「叔母さん。その例えちよつとヤダ」

ここで騎士という言葉が出てこないのは騎士という職種がこの国
にないからだけだ。でも。

「……お姫様って」

僕は男。男ですよ。

「ふふ。遠くから見てたらそう見えるわよ。ここに通り出してから
はずつとそうじゃない。ダットを虐めようとする子を片っ端からや
っつけてたのは主にライナちゃんよ。エリクくんもたまに手を出し
てみたいけどね」

それは僕も知っている。

自分に自信がなかったから、からかってくる相手に何も言い返せ
ずに黙っていることしかできなくて。そんな時は大抵ライナやエリ
クが駆けつけて来ていたことを思い出す。

それだけじゃない。

【ダット（僕）】が一人の時に絡んできた数人が後でケガをしていて、ライナも似たようなケガしていたこともあった。それは守られていたということに違いないだろう。

実際に【ダット（僕）】はそう感じていたし、同時に申し訳ないとも思っていた。

「そんなライナちゃんだからきつと今のダットが不安なんじゃないかしら。今まで彼女が守ってきたダットが急にいなくなったわけでしょう。家族でさえ別人みたいに思えるんだもの。だから納得がいなくて、疑ってるんだと思うわよ」

「だから、あんな態度を？」

「少なくとも、わたしはそう感じたわね」

そう叔母さんは言って立ち止まる。

一瞬目的地に着いたのかとも思ったが、違った。

「あのね、ダット」

振り返った叔母さんが、腰を落とし僕の視線に自分の視線を合わせる。

「きつと、ライナちゃんは急に大人になったダットがダットだって認識できてないだけだと思っわ」

「え？」

「今、あなたに起きている変化は本来長い年月をかけて起こるべきだったものよ。人は最初は未熟な子どもだけれど、やがて成熟した大人へと変わっていく。あなたはこういう理屈かはわからないけれど、その工程を全て通り越して大人の態度を取るようになってしまった。それが周囲にどれだけ動揺を与えようと思う？ わたしから見ても、あなたはまるつきり前のあなたとは違う別人に見えるわ。ふとした動作、癖なんか、以前のダットと同じだと気付かなければきつとそう断言していたわね。ダット。彼女は子どもよ。大人の視点で、わたしと同じようには見ることができないの。それを忘れて大人の言葉を押しつけるのは駄目。理屈じゃなくて、ちゃんと心で

ライナちゃんと向き合うの。それが子どもらしいってこと。感謝の気持ちだったり、気に入らないからって怒ったり。ちゃんとその感情を言葉にしなくちゃ伝わらないわよ」

だから、と叔母さんは最後に笑って。

「ライナちゃんと友だちでしょ。受け容れられなかったのなら仕方ない、なんて気取ったことは考えずにどーんと自分の気持ちをぶつけてきなさい」

【魔導具】である指輪を身につけた指が、僕の背後を示す。

つられて振り返ってみれば、一つ、二つ向こうの本棚の影。そこには見覚えのある銀色の髪の毛の束が一本見え隠れしていて。

「ばればれ？」

うん。隠れてるつもりで、隠れられてないな。

「かわいいわよね。ほんとに」

叔母さんは楽しいと嬉しいの両方を含めた表情でうんうんと頷いている。

青春だね。とでも思っているのかもしれない。

「……今、授業中だよ。一応」

「あらー。真面目ね。でも、こういうのはきつかけが肝心。ほら、行ってきなさい」

しっしっ、と犬を追い払うかのような仕草をされて、僕は大きく嘆息した。

多分この様子だと資料になる本の所まで案内してもらえそうになり。

「行ってくる」

僕はそうして来た道を逆に戻っていき、銀色の髪が揺れているその場所で顔を覗かせて声をかけたら。

「ライ「きゃーっ!」「」

……逃げられた。

なんでそうなる。

避難誘導訓練です

いや、いきなり声をかけたのが悪かった。のだと思う。けどさ。

書庫でこっそり（実はばれれば良かったけど）僕をつけていたライナに声をかけた瞬間に悲鳴あげて逃げられるって……結構傷ついただけ。

それがいけなかったのか、あれから僕が話しかけようとするたびにライナは逃げる逃げる。

ちよつとでも、僕がライナに近づこうと行動を起こした瞬間に視界から消えるとか。そりゃないだろうって感じた。

そのくせ、授業中とか僕の方をじーっと睨んでるし。

逃げたのを追いかけて捕まえるのも有りなんだろうけど。これにはちよつと問題が。

僕の体はライナよりも背が低くて運動が得意な方じゃないし、逆にライナは運動が得意。とくれば、結果はもうわかりきっている。

鍛えれば別かも知れないけど、今すぐは無理無理。

それならライナの家まで行って話をつけよう、としたら「会いたくない」とまた拒否られる始末。

そんなわけで、翌日、翌々日と経過してしまい。

なんでだろうね。ライナを追いかけるうちに「僕ストーカーか？」とかちよつと落ち込んださ。

「……エリク。アレ、捕まえられる？」

今、僕らは青空教室よろしく自警団の団員に囲まれて学校の校庭にいる。教室に関係なく集められた子どもたちの数はおよそ二百名。要するに全校生徒だ。

僕とエリクはその真ん中辺りに陣取って体育座りをしていた。ラ

イナはその後方。こちらを伺える位置にいる。

まったくもってやりづらい。

周囲の好奇の視線も、ライナを追いかけることもいい加減面倒になつてきたので、正直僕の機嫌はよろしくない。多分、今まで【ダツト（僕）】がしたことのない目になっているはずだ。

「いや、無理」

エリクは即答だった。

「あいつ最近、風魔法おぼえたる。俺じゃつかまえられねーよ」

「ああ。そっか。【疾風走行】ね」

そういえば、僕が頭を打つ前にライナが自慢していたっけ。

確か【魔法基礎読本】にも掲載されている、早く走れるようになる魔法だったはず。

元々の彼女の身体能力も合わせると、いくら体力に自信のあるエリクでだって無理だ。

というか、この【疾風走行】。【魔法基礎読本】の中でも難しい部類に入る補助魔法だって話なんだけど。

普通そこまで行くのって二年とか三年かかるらしいのに、あの幼馴染みは一年であの本の中身をほぼマスターしてしまつたらしい。

初歩の初歩。薪に火を付けるとか、風を吹かせるとか、それでさえ半年かかってしまう人間もいるのに。これぞ才能というやつか。

「あいつ、そのうち王都とか帝国の方の魔法学校に行くんじゃない？」

「そうかもね」

飛び抜けた才能がある生徒は領主が推薦状を書く。本人の希望にもよるが、それにより大きな専門の学校に行くことができるのだ。

実はシェリナ叔母さんもそのクチで、王都の魔法学校に二年。そこから魔法が盛んな他国へ三年留学させてもらっていた。

その割にこんなところで教師やってるのがどうにも疑問ではあるんだけど。

「よし。いいかーよく聞けー。これから魔物に出くわしたときに対処法を教えるぞ」

落ち着かない子どもたちに対して、授業の先生役となった自警団の団員が声を張り上げる。

自警団の緑色の詰め襟制服を着崩した彼には、見覚えがある。確か父さんと同年代だったはずだ。彼は生徒の注目の的となっても特に萎縮することもなく話を続けた。

「地を駆ける魔物は素早いことが多い。子どもの足で逃げるのは難しいだろう。建物の中に避難することが出来るだけの時間がある場合は、それでいい。だが、それが無理だったときは木に登るか、魔物の大きさでは入ってこられないような場所に入り込むのが有効だ。この近辺の魔物は体が人間よりもデカイのが大多数だからな。空を飛ぶやつらの場合は……障害物が有効だ。建物の影の隙間なんかでもいい。とにかくやつらの入り込めないような隙間に隠れる。今日はそのあたりを考慮して、避難できる場所の確認も行う。住んでいる場所によっても違うので、それぞれに分かれてもらう」

そうして彼は生徒を囲む自警団の団員たちの名を呼んだ。

「ドゥークとウェルズは北区。ルイザとカーシユは西区。ナンとフアリスは中央。キリエとゴルドは東区。リアとメイレルは南区を担当する。それぞれ住んでいる地区を回ってもらう予定だ。他にもめぼしい場所には団員を配置してあるので聞きたいことがあればその都度質問を。毎度のことではあるが、この確認は君たちの安全を確保するための重要なものだ。いざというとき、きちんと対応できるようにしっかりと確認してほしい。以上だ」

説明が終わると同時に、それぞれ担当する地区の団員が「北地区はこっちなー」「真ん中はこーこー」などと声を上げ始める。

僕もエリクも、そしてライナも東部地区になるのでキリエさんとゴルドさんペアの所になる。

集まった人数は大体三十人くらいか。

「おし、坊主ども。集まったな！」

赤髪を短く刈っている陽気な男性がゴルドさん。

「はぐれないようについてきてくださいね」

少し長めの茶髪を後ろで一つに縛っている男性がキリエさんだ。二人とも二十代半ばで、キリエさんは妻帯者。もうすぐ子どもが生まれると父さんが言っていたのを覚えている。

どちらもカーライル東部に家があるので、この人選になったのだらう。

二人を先頭にして、まず向かったのは学校内の避難に適した場所だった。

校舎内は省き、校庭内の用具入れや、緊急時に入れる地下壕などの場所。木に登るならどんな木がいいか。登り方。登るときの注意事項なども実践を交えて教えてもらう。

木登りに関しては……まあ、運動神経よくなきゃ難しいし、ある程度身長がないと厳しいだらう。ということで、僕はその選択肢を除外した。

続いて向かったのは、学校の外。学校自体はやや北区寄りだけど一応中央の範疇に入っている。そこから東。王都へ向かう街道が整備されているので、大通りがある場所を目指して進んでいく。

「東地区は……北区みたいに農場があるわけじゃねえしな。ほとんど家屋ばっかだ。基本的に家の中に逃げ込めば問題ねえ。それでも駄目な時は……この辺だな」

家と家の隙間。大人一人が通るのも難しいようなその場所をゴルドさんが示す。

「俺たちじゃ無理だが子どもなら入り込める。でかい魔物なら、入ってこられねえから丁度良い。実際十年つくらい前にこういう所に逃げたおかげで助かったのもいるから、しっかり覚えておけよ」

「はい」

比較的素直な子どもたちの返事がいくつも重なる。ちょっと暢気にも聞こえるけど、その表情は真剣だ。きつと親世代から色々聞かされてるからだらう。

それも自分たち人間が魔物に対抗する術が少ないことをわかっているからこそ、のこと。

大抵は町の外で撃退されるけど、そうすることが出来ないこともあるから油断はできない。

これは町全体が積み重ねてきた歴史でもある。

「じゃー、次行くぞー」

町行く人とすれ違いながら、歩く。

ただ、年少五歳の少年少女が数名混じっているわけで、休憩を挟みつつだ。

一度目の休憩も、二度目の休憩もわかりやすいようにと街道へ向かう東の大通り、馬を休める水場の近くで取った。

他の町からやってきた商人やら、これから町を出て行くこととする人たちが集まったその場所はそこそこ騒がしい。

馬を預かる厩もいくつか建っていて、僕はそこで頭のとっぺんが一階の天井に届こうかという大きさの馬を見上げていた。

日本では見たことがない大きさの馬である。しかも頭のとっぺんには天を突くような二本の角が生えているし、目つきも鋭い。

魔物が普通に闊歩する世界なわけだし、それに合わせた進化なんだろうけど。

前世の記憶が甦るまでは普通だと思っていた光景でも、今こうして見てみると違和感ありまくりだ。

「……デカイし、角生えてるし。姿形は馬そのものなんだけど。流石異世界」

そう言うしかない。

「何言ってるの。おまえ」

うっかりばやいたそれを隣にいたエリクが聞いていたみただけで、理解できないだろうから放っておく。

「よし。じゃあ、休憩終わりだ。帰るぞ」

背中側からそんな声が聞こえてきたので、振り返る。同時に点呼も始まったようなので急いで集合場所に戻ることにした。のだが。

不意に服を引っ張られる感触がして足を止めた。

場所は腰の辺り。

見下ろすと五歳程度の少年が困ったように立っていた。

うす茶色の髪に少し不安そうな青い目が、僕の視線と合わさる。

「え、と。なに?」

確かこの子は……僕と同年の少女の弟だったはず。

「おー、どうしたダット」

立ち止まった僕に気付いたエリクが振り返る。状況がすぐわかったのか、僕と僕の服を掴んだ少年を見るなり戻ってくる。

「なんだよ。こいつユファの弟じゃん。どうした?」

「わかんない。今から聞くところ」

僕はそう言っただけじゃがみ込む。視線が同じ高さになったところで、尋ねてみた。

「どうしたの?」

すると少年は泣きそうな顔になって。

「あのね。ユファおねえちゃんが、さっきのひなんじょにわすれものしたからつてもどっていつちゃったの。すぐもどるから、つていつてただけど。もどってこないの」

と訴えてきた。

「あー。心配になっちゃったんだ?」

「うん。でもさがしにいきたいけど、まってるようにいわれたの。でも、じけいだんのおじさんたちにはいつちゃだめって」

「え。なんで?」

「かっつてもどったのを、しかられるって。だから、ひみつにしないだめって」

「ああ。だからそんな泣きそうになつてんのか」

エリクが少年の頭をぐしゃぐしゃとなで回した。

僕の顔を見た少年は。

「おねえちゃん、さがしてくれる?」

涙を溜めて懇願してくる。

僕はエリクと顔を見合わせて「どうする?」と目だけで語り合う。

「僕は探しに戻ってもいいけど。キリエさんたちに知らせないでっ

ていつのは……どうだろう」

「けどさ。ちよつと行って戻ってくるだけだぞ。それぐらいで叱られるのもなあ。俺はヤダ」

「まあ、エリクはそんなものだろうけど。いいよ。僕が捜してくる。適当にごまかしといて」

「え、だいじよぶか。おまえ」

「平気だよ。僕は前の僕じゃないんだし。エリクも叱りたいなら一緒に来れば？」

「……行かねえ」

どうせすぐ戻ってくるんだろ。とエリクはぼやくと僕を追い払う真似事をしてくれた。

ということはこれで確定か。

「え、と。じゃあ、僕がちよつと行って捜してくるからエリクはこの子と待機。言い訳は適当に考えておいて。じゃ、よろしく」

馬車が行き交う中、僕は二人に軽く手を振ってすぐ近くの路地に入る。

この近辺は自分たちの庭のようなものなので、大体の方角さえわかっているれば迷うこともない。とはいえ、町の東側は町が大きくなる度に外壁が増築されていったため、少し入り組んでいる。撤去されるはずだった部分が様々な理由で残ったままだったりするのだが、それが路地を迷路のように感じさせた。奥へ奥へと進む度、人の気配がなくなっていく。

それまでの狭さが嘘のように突然開けた場所に出くわす。

家が一軒建てられる大きさの広場だ。元々外壁が撤去されていれば家が建つ予定だったらしいが、撤去されずに残ってしまったために地下壕を掘っただけに留まったとのこと。

それが百年ほど前。詳しくは知らない。

入り口は外壁沿いにあり、地上部分は普通に草が生えただけの地面なので普段は子どもたちの遊び場になっていた。

警戒など不必要な、子どもたちの庭。

思えば、これが間違いだっただと僕はすぐに後悔することになる。

「ここ、かな？」

地下壕への扉に手をかける。と。

リン。

背後から小さな鈴の音が聞こえた。

同時に。

【風散り】

甘い花の香りと、微かに誰かの声がした。

暗闇と牢獄

ひやははは。ざまあみやがれ。これであいつも大人しく……

なってもらわなければ困るよ。ぼくたちに敵わないと思いき知ってもらわないと。

そうですねよ。これで俺たちが堂々とこの町歩けるようになるんです！

がしゃん、ぼすつ、がちやん。

随分と耳障りな音に気付いて目を開けた僕は。

「……………」

まったく何も見えない状態であることに気が付いた。

真っ暗。ほんとに何も無い。まさしく闇。

えー、僕夢見てる？ と思ったのはきつと間違いじゃないはず。

だって、頭ぼーっとしてたしね。

鼻の奥には甘い花の香りが残ってたし、そのまま目を閉じてしまったわけだけでも。

二度目に目が覚めた時はそういうわけにもいかなかった。

自分の目を疑ったよ。だって目が覚めたはずなのに、夢と同じ状況だったから。

いや、実際には紛れもない現実だったんですけどね。

というわけで、現在の状況確認をば。

一、何も見えない。目を開けても閉じても真っ暗闇です。

二、ほごりっぱいし、ものすごくカビ臭い。しかもなんだかわからない匂いも混ざってる。

三、どこかで水がぴちゃぴちゃ言ってる。

四、体に時々震えが来るくらいには寒い。

四番目を感じたときに、僕はなんでこんな所に寝転がっているのか不思議だったんだけど。

「……どこだ、ここ」

「え、と。たぶん、地下？」

五、どうやら先客がいらっしやっただようです。

「よかった。目が覚めたんだね」

女の子の声かしてるんだけど。って、あれ？

僕はふと、寝転がっている頭が柔らかくて温かいものの上に乗っていることに気がついた。

いかんせん真っ暗闇なので状況がよくわからなかったが、女の子の声には聞き覚えがある。

「ユファ、ちゃん？」

「うん」

即答をありがとう。知ってる人でよかった。というか、今僕の頭に乗っているのはもしかしなくてもユファちゃんの膝、だよな？

確認するまでもなく頭の上から振ってきた声は彼女のものなのだが、頭の下にある女の子の膝という事実が僕を混乱させていた。

「え、と。なんでこんなことに？」

僕としてはそれは、ユファちゃんの膝の上にどうして僕の頭があるのか、の質問だったのだけれど。

「ごめんね、ダットくん。わたしのせいで」

「え、ちょ。ユファちゃん？ 話が見えないんだけど」
暗闇で表情が見えないせいだろうか。見事に見当違いの返答が戻ってきた。

まあ、彼女の語ったそれが真つ暗な場所にいる理由に繋がるものだった少しは冷静になれましたが。

ユファちゃんが落ち込んだ様子だったので、とりあえず僕は体を起こして現状の把握に努めることに。

えーっと。確か。

「僕、ユファちゃんの弟にユファちゃんが地下壕に忘れ物したって聞いて探しに来たんだよ。それで地下壕の入り口のところまで行ったんだけど」

その後の記憶がすっぱり抜けているんだよね。困ったことに。

どうしてこんなところでユファちゃんの膝枕にお世話になっていたのやら、皆目見当が付かない。

首を傾げたところで暗闇が怖いのかユファちゃんに手を握られた。安心させるように手を握り返せば、ユファちゃんは「それ、違う」と声を出した。

「わたしそんなことあの子に言っていない」

怪訝そうに返してくるユファちゃん。

「ええ？ でも」

僕とエリクが弟くんから聞いたのは間違いないのに。

「リオが、そう言ったの？」

「そうだけど……」

ユファちゃんは弟にそんなこと言っていないという。だとすれば一体何故かの少年はあんなことを言ったのだろうか。

首を傾げる僕に。

「じゃあ、やっぱりあいつだ」

心当たりがあるらしく、ユファちゃんが唸った。

「ギド・ルヴェール。あの人だよ。絶対そう。気絶してたダットくんを連れてきたのもあの人とその仲間だったもの」

「ええ？」

思いもよらない名前が飛び出てきて、僕の顔は苦く歪んだ。幸い暗闇の中でユファちゃんに見せることもなかったが、嫌悪感というかなんというか、呆れにも似た感情が湧き上がる。

思い浮かんだのはエリクと同じ赤い髪。目つきがいかにも荒んでいますと言わんばかりの少年。

ちなみに僕やユファちゃんより三つ年上で、しかも弱い者いじめが大好きで、柄の悪い連中とも付き合いがあるという噂の大人でも手こずるタイプの人間である。

取り巻きも何人がいて、そいつらと一緒に僕にも何度か絡んできたことがあるけど、そういう時は大抵ライナが対処してくれていた。エリクとは違う意味で彼女とは犬猿の仲な間柄だ。

「あの問題児が……？」

ギドは元々、ライナのことを敵視していた。そのライナに守られる僕のこと、いつも蔑んだ目で見ていた気がする。

その始まりは確か、何年前か前にギドが僕に絡んできてそれをライナがケガをしながらもボコボコにしたことだ。

ギドは体格がよくて、ライナはどちらかというと細身。

その体格差があつて負けたという事実はある少年には屈辱的だったろう。

しかもその後彼女によって軽くあしらわれることが多く、ギドの怒りは募る一方だったはず。

そこにきて、僕がライナから避けられるというこの状態。

もし、いつも僕にべつたりだったライナが僕から離れたことで、彼らが行動を起こしたのだとしたら。

「うわあ……ヤバイ」

いろんな意味でヤバイ。

ライナのことだから、知恵を働かせてどうにかしようとするだろうけど。きっと彼女は怒り狂ってギドを殴り飛ばすだろう。そう。魔法を使っても。

まだ僕を友だちだと思ってくれていれば、だけど。でも、そうだとすれば。

僕は手を握りしめているユファちゃんの方角を見る。

「……もし、僕の考えてることが当たりなら。謝らないといけないのは僕の方だよ」

彼女にはなんら関係ないはずだ。むしろこちらがユファちゃんを巻き込んだことになるのだから。

そう思っただったのだが。

「うっん。それはわたしの方だよ」

ユファちゃんは強く否定した。そして次に続いたのは予想外の言葉だ。

「あのね。少し前にあの人がわたしに彼女になれって言うてきたの」「ええっ！」

地下の石畳に反射して、思った以上に声が響いた。慌てて余っている方の手で口を押さえるが、遅い。

「ごめん、と謝るとユファちゃんは「いいよ」と笑って許してくれた。

「そんな気なかつたから断つたもん。そうしたらあとで恥をかかされたって怒ってて。学校からの帰りとか、しつこくてずっと逃げてたの。それで今日その時のこと急に謝りたいからって言われてね。

取り巻きの人たちに連れられて路地に入ってしまったら、甘い香りがしたの。そしたら急に眠くなって」

なるほど。それでついて行ったらこんな状況になった。というわけか。納得した。

でも軽率だよ。ユファちゃん。

あの手の連中はそんなにあっさり引いてはくれないものなのに。

流石に子ども相手にそう言うのは厳しいかな、と喉元のところで止めておいたけど。

僕も人のこと言えないし。

ユファちゃんの弟はきつと彼らの仲間に言い含められてたんだろ

うな。だから「じけいだんのおじさんたちにはいつちやだめ」だったんだ。彼が実際のところどこまで知っていてそう言ったのかは謎だけだ。

ここから脱出する望みはそのユファちゃんの弟とエリクだけど、ここがどこなのかわからない以上、期待しない方がよさそうだ。

それにしても。

甘い香り。

それを聞いて僕は、ここに来る直前のことを思い出していた。

あの甘い香りを感じた直後に、僕は意識をなくしている。そこからわかるのはあれが眠り薬の類のものということだった。

ああいったものは普通大人の手で管理されているものだから、普通の十三歳の少年が簡単に手に入れられるはずもない。いったいどこで手に入れたのやら。

柄の良くない大人たちとも繋がりがあるともないとも噂があるから、そのあたりからかもしれないが。

「僕も、地下壕のところで甘い匂いを感じたよ」

「そう、なの？ でも、おかしいよ。ダットくんは関係ないのに」

ユファちゃんは心底不思議そうにしていたけれど。

「そうでもないよ」

僕はそう言って笑う。

「ユファちゃんの言うことも間違いないと思うけど。今回のことには僕も多分関係してる。あのギドって子は、何度も僕に絡んでこようとしてたけど大抵はライナに阻まれてたからね。因縁があるんだよ。だからライナが僕と離れてる今が良い機会だと思ったんじゃないかな。僕を楽にいじめられるし、それでライナにも報復できる。ずいぶんと浅はかだけど」

よほど腹に据えかねるものがあつたのだろうが、この行動はあからさまで幼稚すぎる。

ただの子ども同士の喧嘩であればどうということとはなかった。

だが、このことが周りの大人に知られれば、何かしらの処罰が彼

らには与えられるはずだ。それぐらいは容易に思いつくだろうに
「え、と。ダットくん。前とちよつと変わった？」

戸惑ったようにユファちゃんが尋ねてくる。こういう展開はもう
何度目になるだろう。仕方のないことだとわかつているけれど、胸
の奥が痛くなる。

教室の中で奇異の視線を浴びることはもう慣れた。というか、前
世の記憶が戻る以前も似たような視線を向けられることはあったの
だけれど。

「気持ち悪い？」

「え。そんなことないよ」

意外なことに、速攻で否定された。

「ちよつとびつくりしたけど。今ダットくんがいてくれてるから泣
かずにすんでるんだよ。わたし」

ユファちゃんはそう言うと言ったと僕の方へ体を寄せてきた。

ああ。なるほど。この状態だからこそ、彼女はそう言えるのか。
「真つ暗はきらい。こわいから。でも、ダットくんだいて一人じゃ
ないから。大丈夫」

健気だなあ。と思いつながら、僕は改めてユファちゃんの手を握り
返した。

「それは僕も同じだよ。一人で放り込まれていたら……きっと混乱
して喚いてたと思うし」

状況もわからずに、誘拐？ 人さらい？ 僕もしかしてどこかに
売られるの？ と不安に悶えていたはずだ。

実際は単に悪ガキの悪戯 というには度が過ぎるものだとは知
らずに。

これは確実にトラウマの対象範囲内だろう。

「蹴り倒してえ」

想像ではなく現実的に、報復も兼ねて同じ目に遭わせてやるのか。
無理だと思うけど。

イライラと見えない空間を睨みつける。

そんな僕の不穏な空気に気がついたらしいユファちゃんが戸惑ったように「ダットくん？」と声をかけてくる。

あ、しまった。不安にさせたかも？

「ああ、なんでもないよ。ちよつとここを出た後にあいつをどうしてやるうかと考えてただけだから」

「……………ダットくん。こわいよ」

思い切り声に不機嫌さが出ていたようだ。ちよつと反省。

けどまあ、僕が実際にどうこうすることはおそろくない。きつと周りの大人たちによって成敗されることになるだろうから。

それにいつまでも暗い思考に囚われているのもあまりよくない。

「それにしても、ここどこ？」

僕は気を取り直してユファちゃんに尋ねてみる。

ユファちゃんもそれでほつとしたのか、繋がれた手から緊張が抜けた。

「地下、つていうはさつき聞いたけど……………」

暗闇なのでよくわからないが、水が滴る音が聞こえる。

そう遠くない場所のようなので行ってみようかとも思ったものの、この暗闇ではどこになにがあるかわからない。明かりがないと危険だろう。

最もそれも光を生み出す【照明】という初歩的な魔法が使えれば、の話で、生憎と今の僕は【魔素】を集めることすら出来ていない状態。もちろん【呪文】も記憶していないからそれは無理だし、ユファちゃんは魔法を使う素質を持たないようなので、頼めないし。

「どこかの地下壕、なのかな」

「ううん。違うみたい。えっと。見えないからわからないと思うけど。たぶん牢屋？」

「は？」

「自警団の事務所にあるのとよく似てたよ。あそこと違って地下だし、光も入ってこないけど。たしか、あの人がダットくん連れてきた時にずいぶん昔に作られたものだって話してた。あと、ここでた

くさん人が死んだんだぞ……って」

最後に彼女が震えながら付け加えたひとことに僕は唸った。
どう考えてもそれは脅し文句だ。

実際に人が死んだことがあるのかもしれないけど。それだと後に
こう付け加えてそうだ。

「もしかして、ちゃんと埋葬されていない人間もいるから【グラン・
ヴ・デイル】が出るかもって言われたりしなかった？」

【グラン・ヴ・デイル】という言葉を口にした時点でユファち
やんの肩が跳ねたけど、それも仕方ない。

「……言われた」

素直に認めると、彼女はまた僕の方に肩を寄せる。正直に言っと
僕もそれは願ったり叶ったりだったりした。

【グラン・ヴ・デイル】とはこの国で使われている古い言葉で
【実体なき死をもたらす者】の意味を持つ。恨み辛みを残したまま
死んだ者や、まともに埋葬されることがなかった者が大地に還れず
に【魔素】を纏った存在とされており、要するに……日本で言う幽
霊のような魔物だ。

存在を保つためには人間の【生氣】が必要で、人間を襲う。時に
人間の体に乗っ取り、それを操るといふ。

僕が父さんに疑われた【魔物憑き】とは正にこの【グラン・ヴ・
デイル】が大元である。

「……最悪」

聞かなければよかった。

子どもたちに対する戒めとして話されることもあるソレは、否応
なく恐怖を植え付けられる。

ぐすつ、とすぐ横で微かな鳴き声がして僕はキレた。

「やっぱりあいつ、一発ぶっ飛ばしとくか」

こちらの年齢が十歳であることなど、既に吹っ飛んでいた。体の
大きさも明らかに負けるが、関係ない。

向こうは遊び半分かもしれないが、これから先少なくともユファ

ちゃんは暗闇に恐怖を覚えることだろう。

僕だつてこの先しばらくはうなされそうだ。

それを、そうしてしまったことを。僕は許したくない。

ユファちゃんと繋いでいない方の手を怒りにまかせて握り込んだその時だつた。

『ふむ。心地よき思いじやの』

暗闇の一点に突如、青白い光が浮かぶ。

僕もユファちゃんもその唐突な現象にぎよつと目を見開いた。

『怒りや恨み。それは良き感情よ。我らを引き寄せ、力を与える』

声と共にぼんやりとその光は広がっていき、やがて一つの形を取る。

途端、体中の皮膚の上を電流のような怖気が走つた。

ユファちゃんがガタガタと体を震わせ始め、僕もまた強張つた体で青白い光の固まりを呆然と見つめる。

『くくく。大人しく眠つておつたというに。わざわざ贅を用意しよ
うとは人は愚かぞ。あのまま封を解かねば我らは完全に力を失い、
消え失せたであろうに』

形を成したそれは、愉快そうに笑う。

ただし、それは声を聞くからこそわかるもの。

骸骨にぼろぼろのローブとマントとを羽織つただけの存在に表情は存在しなかつた。

噂をすれば影

噂をすれば、影がある。

こんなところで日本のことわざもどきを思い出さなくてもいいだろう、と場違いなことを考えながら、僕はユファちゃんを背にして目の前のそれを睨みつける。

ていうか、よりもよってここでそれに遭遇しようとは。

『小僧よ。その気概は認めるが、そのおなごのとき顔ではいささか頼りないの。守るための力も有してはおらぬだろう。逃げ場もない。我らに抗うは愚かぞ』

「……………【グラン・ヴ・デール】」

この世界に生きる全てのものにとっての天敵。

【実体なき死をもたらす者】。

『ふむ。我らが名をそう呼ぶか。間違いではないが、いささか芸がなくはないものか』

かたかたときこちなく、ソレが腕を組む。

その行為は人間臭いのだが、あくまでも魔物。人間側からしてみれば害を為すものでしかないし、おまけに実体がない存在であるので武器が通じないときた。魔法に通じていれば別だろうが、残念ながら僕もユファちゃんもその手段を執ることが出来ない。

逃げなければ、ということが脳裏に浮かんでいるが、青白い光を放つ【グラン・ヴ・デール】により浮かび上がった室内は正に牢獄。

地上へ向かっている階段があるのは見えたものの、それは仕切られた柵の向こう側。強いては【グラン・ヴ・デール】を超えた先だ。

ただでさえ肌寒かった空間が、さらに冷えたように感じられた。

「い、や。たす、けて」

ユファちゃんが絶望からか、僕にすがりつく。

それは、僕も同じだ。と頭の中だけで返事をして、握った手を握り返す。

元気づけたいのは山々だったが、残念なことに僕にも余裕はなく、逃げ出す算段をつけようとは思うものの、それよりも先に両親や他の大人たちに聞かされた話ばかりが頭を過ぎった。

【グラン・ヴ・デール】の糧。生きた人間の【生氣】のことを。『主らの恐怖を感じる。恐れ、おののいておるな。良き事よ。死とは恐ろしきもの。我らはまさにそれを具現化した存在であるのだから』

【グラン・ヴ・デール】はそう言っただけで僕らの元へ動き出す。地面などまるでないように水平に、だ。

背後には壁しかない。逃げられない。ギリギリまで後ずさりして、ユファちゃんを隠すようにすることしか考えられなかった。

心臓がばくばくと音を立てる。

よりもよって。と僕は歯がみする。

どうして、初めて遭遇する魔物がコレなんだろうか。

どうして、僕はまだ魔法を使えないんだろうか。

完全な無力状態でのこの遭遇は紛れもなく……即死フラグ全開だ。

「く、る、なっ！」

みつともないと感じる余裕もない。

おぞましいと感じる魔物相手に、片腕を振って遠ざけようとする。物質的な攻撃は無意味。それを知っていて、けれどせざるを得ない。

『足掻くは人のさだめ。それもまた美味よ。されど小僧。我らに触れるは軽率ぞ』

愉快、と言わんばかりに【グラン・ヴ・デール】は振り回す僕の手から自らの体を触れさせた。

途端。

「……っ！」

ざわり、と全身が鳴った。

【グラン・ヴ・デール】に触れた手から、何かがごっそりと抜けた。そんな感覚があつて、僕は体中の力が失われたことを知る。

ずる、と重力に従つて手も、足も、体さえも床へ向かつて崩れ落ちた。

「ダットくん！」

かろうじて、と言うべきか。背後のユファちゃんが力を失つた僕の体を支えてくれたので、床に転がる事態だけは避けられた。

だからといってそれで状況が好転するわけでもなかったんだけど。

「……ユファ、ちゃん。に、げ」

こんな台詞は死亡フラグに定番だし、実際に無駄なんだろう。

それでもここで足掻くことは、やめられない。やめたくない。

その思いを持てる人間だからこそ、彼女にもそうしてほしいの願うのは傲慢だろうか。

「だめ。ダットくん。ヤダ。死んじゃ、やだ」

ポロポロとこぼれる涙。それが僕の体の上に落ちていく。ぎゅつと強く抱きしめられて、僕はその暖かさに切なくなつた。

そこで悟る。

多分もう、彼女は逃げないだろう。そして逃げられない。

死んでほしくないといいながら、そこから動かない。誰かが死ぬという事実に向面して、思考がそれを否定して、それ以外考えられなくなっているんだろう。

死が間近に迫っているからだろうか。それもそれで、仕方ないことだと頭のどこかで冷静な声がした。

僕にとっての二度目の死。

一度目は気が付いたら終わっていた。

二度目は、それを与える死神がすぐそこにいてカウントダウンを始めている。

せめてもの救いは、すぐ側に暖かな誰かがいてくれることかもしれない。一緒に死ぬ予定の彼女は……嫌かもしれないけれど。

「ご、めん。ね」

そう口にする、ユファちゃんは必死に頭を横に振った。

「ちが、いや。ダットくん。だめ」

泣いている。涙をこぼして、僕が死ぬことを否定して。

その姿に思い浮かんだのは母のこと。

……また、泣かせるのか。

心配をかけて、気が付いたら涙を浮かべる彼女が、息子の死を悲しまないわけがない。

せめてひとこと謝りたいけれど、それはもう無理だろう。

生を諦めた僕に死を与えるはずの死神。彼の者はもうすぐそこで。

『げに珍しき者に出会ったわ』

何か考え込んでいた。

「……………」

骸骨の頭の部分は僕たちの方を向いておらず、ただそこで漂っている。

僕たちに死をもたらすはずだった【グラン・ヴ・デイル】の動きの変化。それが何を示すのか。この時の僕は全く気がついていなかった。

青白く、不気味に浮かび上がる【グラン・ヴ・デイル】が動くまで、そこからはほんの数秒。

『くくく。我らとて異端なる亡者の徒。なれど、我ら以上に理解できぬ者がいようとは』

ずい、と僕に触れる寸前にまで骸骨の顔を寄せた【グラン・ヴ・デイル】にユファちゃんがひつ、と声を上げて気を失う。

僕を支えていた力が抜けて、二人揃って床に倒れる。

【グラン・ヴ・デイル】がそれを見て、また笑った。嘲笑と取れるその笑いに、僕の頬は吊り上がった。

「殺す、なら、殺せ」

既に逃げられる状態ではない。それがわかっているからの言葉だったのだが。

『それではつまらぬよ。【二重】^{ふたえ}の者』

青白い光がそうして僕らの側から遠ざかる。

そして

『そなたは、今殺すに惜しい』

僕は呆然とそれを聞いた。

「どついう、意味、だ」

『くくく。知りたいか。ならば、知れ』

【グラン・ヴ・デイル】の指の骨が、投げ出された僕の手を指し示す。それは、先ほど【グラン・ヴ・デイル】に触れた手だった。

『触れてわかつたのだ。そなたは我らと似て非なるもの。【二重】^{ふたえ}に重なりし異なる色を持ちし者。それ故の異端。それ故の力。我らはそれを見たいのだ。そして知りたい。されどそなたは未だ未熟。よって今はそなたを生かすことにしたのよ。いずれ、刈り取るためにのう』

【グラン・ヴ・デイル】に触れた手に熱がこもる。

『既に印は付いた。それが証よ』

それは冷たく突き刺すような熱で、見れば手の甲に青白い光が宿っていた。

『それは我らを示すもの。近くあればそなたを導く。故に我らは行こう。そなたが我らの背に届くまで、彼の地にて死を喰らい漂う者となるうではないか』

かかか、と高らかに笑い、【グラン・ヴ・デイル】は僕に背を向けた。

『愉快、愉快。故にそこな娘も生かしてやろうぞ。印も付けぬ。今、我らが望むはそなたと心地よき墮ちし御霊のみよ。最早只人には興味がない。くくく。成長せしそなたの御霊。それを刈るのが楽しみ』^よ

くくく。かかか。

耳障りな哄笑が地下の狭い空間に鳴り響いた。

それを最後に青白い光に包まれた骸骨の姿がゆっくりと小さくなる。

徐々に暗闇に包まれていく視界。

僕の意識はそれに同化するように、遠くなっていっただ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0544x/>

闇色の二重奏

2011年10月13日12時29分発行